# 岳　山

第十七年

第二號

# 山岳

第十七年第二號　大正十三年二月發行

## 目次


三月の劒岳へ　船田三郎……一頁
スノードン　八代準……一一
黑部別山と內藏之助平　沼井鐵太郎……一九
阿蘇九重由布を巡登して　竹內亮……二七
磐梯山　吉岡八二郎……四〇


## 圖版


○立山室堂……對頁八
○五ノ越より見たる劒岳……一六
○梯子谷の雲溪……二四

○御前澤……三二
○九重山北麓の裾野及涌蓋山○久住山頂より東望……四〇

## 雜錄

○藥師岳の新登路（今西錦司）○丘陵山岳及アルプスの範圍（山本德三郎）○白馬岳遭難記（田中晴眞）○沼尻及野尻に就て（木暮）○高山齋類雜記（笹岡久彦）

## 雜報

○關東地方大地震○相州大山の山海嘯○富士山を蹈査に○八ヶ岳に大龜裂○燒岳の噴煙增加
登山案內組合
○石佛會
山岳圖書紹介
○山行○登高行○リュックサック
○會員通信

## 會報

○第十六回大會記事○第二十二回小集會記事○會員幸再貸與○本會規則改訂○會務報告○英文欄中止○會員の訃報○交換及寄贈圖書目
○會告○本會規則拔萃○投稿規定

# 三月の劍岳へ

船田三郎

## 立山室堂

黄昏のなかを六つのSki-ersは最後の幾キロ米突かのフィルム、クラスト（Film crust）を渉つて、終日高原の雪の純白のなかに在つた二枚の木片は疲れたかの如く、冷たい薄暮の氷面に深く埋もれて、吾々の踏み來つた足跡は『ノアの箱船』の如く素朴な、けれども暖かい寢床と、樂しい屋根とをあたへて呉れる小舍へと續いた。又此のスキー小舍は壯麗な耀きと、魅惑的な影りとを有つた氷雪の峰々と谷々を其周圍に繞らしてゐる。半日或は一日掛りでその頂をスキーにて極め得るものに大日岳（二六〇五米）淨土山（二八五〇米？）國見岳（二六二〇米）別山（二八八五米）鶴ヶ御前（二七七七米）等がある。スキーをアレートの麓に預けて、それより凍つた岩と岩との間に險しい足場を殘して頂を極め得るものに雄山（三〇一〇米？）大汝（三〇一五米？）劍岳（二九九八米）等がある。又此のスキー小舍を繞る數多の雪のドーム、地獄谷、稱名川から一の谷、松尾峠へと亘つての丘陵――様々な陽光や風當りの傾斜と、豐富な積雪は、様々な種類の粉雪と凍雪とを吾々に提供して呉れる。そしてこのスキー小舍を中心に、崇高な純白のうちに、終日「雪を滑る人」として數日間は――正確に云へば三月二十七日から四月一日まで――感謝と至福に充ちた感激に浸つて、幻覺は黄金の海を帆走り、憧憬は高き蒼空を驅けて、夢心地は今も尚ほ覺めずに打ち續いてゐる。

## 藤橋から彌陀ケ原へ

三月の彌陀ヶ原――三月のアルプス――三月の Mid-alpine に誰しも非常の好奇心を喚ることが出來る。アルプスの冬は彈性的な期間を持つてゐる。多くは十一月の末から四月一杯は充分に續く。私は五月は勿論、六月にさへ吹雪に遭つた例もある。然し陽光や強風に曝され乍らも冬の特質たる粉雪を保有するのは十二月から二月一杯だ。もう三月の眩耀と駘蕩とは粉雪をいつまでもその儘にしては置かない。乾いた岩角と脊稜に、又は北向きの斜面に粉雪があると同時に、春の雪の特質たるテレマーク、クラスト（Telemark crust）が、南や西向きの斜面には、堅く凍り切つた雪の表面に柔かい雪の層が形成せられる。そして、その斜面にはテレマーク、クラストの輪廻が必ず營まれてゐる。スキー登山に最も容易な、且つ安全な此のクラストと、スキー家の樂園たる粉雪とが、二つ乍ら享樂出來るのが三月のアルプスである。

三月のアルプスの麓には、狼籍として殘雪のあとから赭黑い土表が露はれ、嫩芽は萠え、雪融けの細流が自由と解放を歌ひ、落葉松の梢が黃金色に煙ぶる。然し一歩山部へ踏み込めば、春の氣配は漸やく雪の狀態によりて知るのみである。充分な太陽の光線と暖氣が絶えず雪の無數な粒の成長を助けて、春の粒雪（Granular snow or Hypo snow）が一面に山野を蔽ふてゐる。粒雪はスキーの底面に餘り附着しない、可成り快よい滑走感を齎らす雪質である。丁度吾々が藤橋から彌陀ヶ原の松尾峠あたりまでは、この粒雪の續りであつた。

二十七日。快晴。藤橋を立つた頃はもう隨分明るくなつてゐた。雪に埋もれた稱名川の兩岸や、又そのすり合はせた肩合ひから奥の方の山々が淋しさうに覗いて、山に向ふ時に陷りやすい感傷的な氣持ちに、益々濃い隈を投げて重い動かないものにしていつた。スキーを附けない足もとは幾度となく深く雪の中に落ち込んで、意外に雪が腐つてゐた材木坂を登り切つて、美女平の一端へ出るまでには三時間半も掛つて了つた。彌陀ヶ原を越へて立山室堂まで一日で達しやうとした計畫は見事裏切られ

て了つた。全く材木坂の登り時間が、立山の雪の高原を一日で横切るか、二日に延びるかの分岐點となるのである。美女平を横切つて、彌陀ヶ原の樹もない風の吹き通す砂漠のやうな雪の曠野に出る手前の森林帶で、精しく云へば桑谷の地際を選んで天幕を張つた。勿論此附近は未だ雪も深いので寢床は踏み堅められた雪の上であつた。午後三時、乾いた、けれども非常に生溫るい南風が劇しくあたりの樹々を鳴らして渡つた。いくら無神經な山男等も、暖かい南風が齎らす暗い豫感に、淋しい氣持ちに壓しつけられて、立山溫泉へ避難せねばならぬ破目に陷る懸念さへ論議されてゐた。夕食前、影り易い午後の春雪の斜面を登つて附近の小高いドームの上に立つた。待ち設けたやうにどつとぶつかつて來たフェーン(Foehn)が素早く行き過ぎた後は、銀色に燃えた彌陀ヶ原の廣い春雪の擴り、それから廓然と澄み返つた立山、藥師の峰々、殊に藥師から越中澤の乘越へとひいた午後の白々しい煌きは痛々しいものであつた。ほんとうに澄み渡つた蒼穹、力强いスカイライン、暖かい乾いた風、そう云ふ事實から、暖かい南風の原因が局部的なフェーンであると云ふ推察が明日の天候の豫想を光明へと導ひて呉れた。輝やかしい、けれども憂鬱を浮べた斜陽が雪面を這ひ、「もみ」の梢が美はしい火焔に燃え、峰々の頂は黄金の寶冠に耀き、高き空の隅々までも血紅色に燒け擴がる頃までも、吾々の輕い小舟は音律のやうに、微風のやうに幻想を乘せたプロムナードを續けてゐた。雪の中に落ち込んでゆく焚火が「ぶな」の梢を闇からくつきりと描き出す頃、始めてスキーは焚火の周圍へとつき挿された。やがて雪の上に身を横へた頃も尙ほ、春雪(粒雪)の滑走感が夢までも連なつた。

三月二十八日。今朝も亦素晴らしい天氣だ。グレッシヤー、グラスを掛けて、雪のドームの上に飛び出すと、雄大な藥師岳が肉眼では見えない細部まで、殊にスカイラインの對象が恐ろしい程明確に現はれて來る。頂から北へ幾つも弧を描いてスキーヤーを驚喜させる素敵な粉雪を湛へてゐるらしい圈谷が竝んでゐる。雪は多孔性の凍氷である。スキーは角づけも留めずに鋭い響を立てゝ滑つて行

く。海豹皮は室堂までは用ひない事にした。

彌陀ヶ原の上部森林限界線は極めて不明瞭である。黑部杉（ねず）としらびその混合林が一六〇〇米突附近で杜絶えたかと思ふと、常願寺川の懸崖とその附近は二〇〇〇米突附近までも喬木の密林が延びてゐる。此の上部森林限界線が、彌陀ヶ原の雪の曠野を通ふカラバンに取つて、避難所ともなるべき重大な意義を齎らすのである。殊に雪と對象して『黑』の感じを與へるしらびその森林が、密生した隱花植物の黑い葉が雪に敷いて快よい褥となり、又雪を防ぐ嬉しい屋根ともなつて呉れる。桑谷の露營地から此の森林帶を出拔けて了ふまでには一時間も掛つた。

心ゆくまでに透明なライラックの空、その下に豐かな、さはやかな眞珠色を湛へた彌陀ヶ原の高原が横たはり、唐松峠や天狗平は、その廣漠とした原の一角に在つた。天狗平から上は、北向きの斜面を横切るので、雪の斜面に對する太陽の作用が稀薄になり、早春のアルプスに普通なフィルム、クラスト（film crust）が山坡を被ふて鈍い螢光のやうな空の色を浮べてゐた。吾々の目指す劍岳もスノー、スカイに覗き上つて來た。比較物もない茫漠とした雪の原を辿り乍ら、はち切れそうに詰つたリュックサックが重く肩に耐へて、幾度かこのやうな雪質なら橇を用ひたならどんなによかつたらうかと喋り合つた。

丁度英國スキー倶樂部の年報に「スピッツベルゲンの橇とスキーの旅」と云ふ紀行文が載つてゐた。それによつて吾々の間にも、この立山に橇を使用する可否に就いての問題が可成り論議された、極地を尋ぬる橇の旅、ツンドラの荒廣を馳る橇の旅、そう云ふ聯想から齎らされる憧憬と好奇の心が、小供の持つやうな強い誘惑と執着とに迷つた。然し、N. E. Odell 氏の論文の中に、好都合な地形と、乾いた大氣と、少くとも二十四時間の太陽の光線とが橇の旅には必要な條件として記載されてゐる。立山の地形は橇の使用には確かに好都合な部分を多量に持つてゐる。然しあとの二つの條件が遂に吾

々に決行する勇氣を缺かして了つたのであつた。

終日山々を銀の焰に燒き盡してゐた太陽も、いまは一つの火球となつて淨土山の冷却した灰色の雪の堆積へ隱れて、めつきり俄に青褪めた一の越の窪谷の麓へとスキーの足元が向つた處に、立山の室堂——吾々の ski hut の漸やく雪の上に二、三尺程露はれた黑い破風が、その存在を示してゐた。一尺立方位の雪塊が、シャベルの先端から拋り出されて、三尺位の雪のトンネルが室堂の屋根裏にまで屆いたのは、漸やく三、四十分後の事であつた。

此の夜も亦、物の響きから取り殘されたやうな月光の峰々が、スキー小舍を圍んで、ただ一方、脚下に擴つた彌陀ヶ原の涯に、雲の波が押し寄せてゐた。

三月二十九日。朝から冷たく氷つた凍雪の上に、灰のやうに輕い雪が、南方から吹き亂ろす雲霧に持ち運ばれて來た。終日執拗にガスが小屋を繞つて、幾本かのスラロームを淨土の斜面に描いたのみで漸やくその日は吹雪の裡に暮れて行つた。夜に入つての吹雪は杜絶え、新雪に照つた月光は幽溟な耀きを漂はした。

## 劍岳へ

立山のスキー小舍から劍の頂へのコースは、去年(大正十一年)四月、五月の再度の慶應山岳部の人々の登山によつて、ほぼ吾々の採るべき豫定線が地圖には記入されてはあつたが、結局吾々の辿つた結果は異つた新らたなる線の記入を、或は訂正すべき考慮を餘儀なくせしめた。けれどもその細部に亘つてまでの研究は可成り私にとつて熟慮と注意とを喚起せしめた。それには出來る限りの完全な登山術を遂行する事による種々な條件と、新らしい試みと、新らしい訂正とが必要であつた。又新らしい冬の登路の發見の企て、それは最も眩惑的な歡喜せしむる事柄ではあつたが、今回の登山の記錄の頁

を繰る時に種々な幻想と抱負とが餘りに廣はしかつた丈け、幻滅の悲愁に裏切られた事も大であつた。それには隊員各自の登山技術の輕輕、體格の相違、經驗と智識の不充分、そう云ふ事が最初の計畫を遂行するに蹉跌を來たさしめたのである。

今劔の登山として考ふるものは、或る地點までスキーを使用し、それ以上は徒歩にて岩、氷、雪の登攀を行ふ "Combination method" を應用するものである以上、その登攀距離を出來る丈け短縮し、又スキー滑走距離は出來る丈けその滑走面を緩傾斜に採つて、且つ短縮するのを原則とし、之に加ふるに登攀に際して雪崩の虞の無き限り、可能的に南或は南西の傾斜面を選び、スキーの滑降には可能的に北或は北東の傾斜面を採る事によつて、時間と勞働とを節約する事を心懸けねばならぬ。然しスキーヤーに最後の目的地を指示するなら、出發點と終局點との間の地域のスキー通過可能度を探究する際に、それには最も安全であり、最も容易であり、最も短距離であると云原則は勿論忘れてはゐない。而して是等の事を地圖上に於て精細に探究するには、種々な障害と困難とが現はれて來る。例へば雲庇、積雪、雪崩地、雪泡、避難所、溪流等がアルプスの夏季の登山に於て更に考慮に入れてゐない世界が、冬季或は春季登山者の爲めに新らしい地圖上の記入を必要として來る。其處で必然的にスキー登山家が地圖上に於て登路を研究する際には、在來の地圖、それが假令陸地測量部の如き精巧な地形圖幅も直ちに之を全く取り入れて用ふる事が出來ない。殊に斷崖、背斜地、溪流、峽谷の研究に於ては大なる援助とはならないのである。溪流に沿ふての、又は溪流を横切るスキーの滑走可能度は期節、方位等に依り決定されるもので、冬末から早春に亙つてはアルプスに於ける溪流の多くは堅氷と積雪とに被はれて『海』を形成し、スキー滑走路としては好都合の狀態に在るのである。

そこで吾々のコースの豫定は、立山室堂のスキー小舍から直ちに、一の越から發し稱名川に注ぐ側流の海を滑降して、別山乘越の鞍部から來る雷鳥澤の麓に出でて、この峽容を登り切つて別山乘越の

スキー、デパ（Ski-depat）に達し、金樔によつて鶴ヶ御前より劍岳の頂まで徒歩登攀をなして最後の目的地に取りつく豫定であつた。歸途は同じコースを逆に踏んで室堂に戻る心算ではあつたが、結果は、歸途は平藏谷を下り、劍澤を登つて朝の登路に合したのである。

三月卅日。劍の氷、雪、岩の登攀の日は、天空の奥まで漲り澄んで、聖なる青空が雪の峰々の頂の上に擴つてゐた。然し日本海の平原や又灰色の溪間には厚い重い雨雲が終日蔽ふて、霽れそうにもなかつた。けれども厚い積雲から拔き出でた雪の脊梁や峰々は、突飛な程暖かい風と、光りと、色彩の大氣の裡に包まれてゐた。

ガランとした小屋から闇に赤く滲んだランターンが搖れて、窮屈な梯子段のついた天井裏から戸外へと出た。雪と空とは薄光に明けていつた。目も遙かな粉雪の堆積とその蜿り、その果に靜かなる山の姿、大日岳から別山、雄山、淨土山へと繞る雪嶺と絶巔、其處に永らく憧れて遂に果し得なかつた夢を果すべく、四つの人影は灰の如く輕い粉雪を蹴つて、室堂の高みからミクリが池を左手に、稱名川の「海」へと滑り續けた。そして雷鳥澤の圈谷の懸命な登高の努力と、キックターンが繰り返へされる毎に、朝は薔薇に色づく大日岳の頂も亦、足元までも押し寄せてゐる早月谷の蒼白い雪の海も、次第々々に目の下へと沈んでいつた。

午前九時別山乘越着。劍岳は劍澤から黑部の谷へ奎湧する白雲の上に、爽快な朝暾に輝いてゐる。別山の乘越は烈風の爲めにシユカヴラ（Skavla諸國語にて風により波狀を描ける雪面を云ふ）をなし、乾いた粉雪は風に遁はれ、岩角を掠め凍雪を匍つて煙の如く灰の如く空へと捲き上つてゆく。

別山乘越から望んだ劍岳の壯大な氷塊は、憧れた心を深い強い測り難い喜悅の情に充たして呉れた。殊に私は劍岳が好きだ。劍岳の事を語る時に瞳は異常な歡喜と讃嘆に充される。大地を貫いた莊嚴な雪と氷と岩の造營に、又寒冷と風雪に養はれ、飾られた冬期の神秘な眠りの劍岳を仰ぐ時、眼も

眩む程な感激は、崇敬に迄私の愛を高める。

スキーを雷鳥澤の圏谷に預けて、輪樏に穿き代へる。愈〻劒の脊稜傳ひである。雲海に浮ぶ冬の脊稜は、何となく悲鬱と哀愁を誘ふ。それも早月谷側は雪も鎧はぬ岩壁であり、劒澤側は絡む事さへ危險な雪の斜面である。でそのコースは龍迄文字通りの脊稜縱走である。鶴ヶ御前の二七七七米突の頂までは幅廣い尾根が續く。脊梁はそこから北に急峻に下つて劒へ連る第一の鞍部となる。休む度に固く乾き切つた黑パンと板チョコレートを嚙んで、四圍の壯觀に見入る事は忘れなかつた。又其處から平藏谷の頭までは一哩許りの尾根を二三〇米突位登れば達せられるのではあるが、深くぬかる雪の斜面に甲斐ない努力は幾度か繰返されて、平藏谷の頭に出たのはかれこれ二時間も後の事であつた。ロープで一同珠數つなぎになつてゐたのは云ふまでもない。此處で強く反射する稜雪の上に、岩角の風淀みを選んでロープを敷いて、私達の脊負つて來た贅澤な晝食をはじめた。十二時。アルコール混爐で沸された熱い黑いコーヒの湯氣が平藏谷の岩壁に淡紫に昇つて、風もなく一杯に注ぐ光にゐねむりを催ふす程だ。又茲から見た大觀は、槍、穗高から笠、黑、藥師、立山群巒の峰々が厚い綿雲の上に、雪の輝きと影りのみを浮べて鋭い透明な刃のやうに、いかにもその標高を高く見せてゐる。今まで點々と殘された足跡は、鋭角に尖つた頂や、青藍に影つた氷壁に今更のやうに思はれる急峻な斜面にも續いて、その末は別山乘越へまで湧き上つて來た雲の中へと消えて行く。休憩一時間後出發。

平藏谷のクーロアール（Couloir）は頭の上に、雪の禿げたギザギザした岩稜の裾から、水沫のやうな雪の急斜面が辷る。アイスアックスを短く握り、ロープは凍雪にその腹を擦つて、一歩づつ高く高く迫り上つた。反射する雪より黑い岩に移つてからも、手袋を外し、アックスを手首に吊げて懸命なチムニーの『岩登り』が暫く續いた。

再び凍つた雪の上にステップを刻んで、靜かに劒の脊梁を登つた。その凍り切つた雪稜は、青海の

立山室堂(三月)　　伊藤孝一氏撮影

潮のやうな蒼穹に最も單純な鋭角をなして頂までへと連つた。四つの登山者が長い蔭影を氷壁に曳いて絶巓に立つた時、遙か左手の脚下に、その涯が雲に消えて行く氷の斜面に、頂の三角標は一尺ほどの頭を擡げて漸やくその存在を主張してゐた（二時十分）。

長次郎谷の氷谷へと臨んだ雄大な雪庇は杜斷れ杜斷れに三窓の頭まで連り、八峰の鋭い氷雪のエキーユが長次郎谷の氷圏へとそゝり立つて劒澤へと連つてゐる。雪庇の上に堆積した粉雪に、深く刻まれた足跡は、遙か脊梁を下へ長次郎谷の肩までと下つて行つたが、それは遂に無爲に終つて了つた。青光りする雪庇の蔭は、百米突ほどのロープでは到底下る事は不可能と思はれる程の氷壁であつた。すでに青磁色の水底のやうに影つた長次郎谷の氷壁の縁を、先刻の足跡をもとへと廻りつゝ黄昏に洗まんとする劒澤の峽谷を見下した時は、遣る瀬ない淋しみが胸を塞いだ。

歸途は先頭に私が、次に大井、澤田、佐伯の順に再び劒の頂を超えてから、一列のロープは一直線に平藏谷を馳せ降りて、灰色の峽谷へと吸ひ込まれていつた。平藏谷の峽谷を下るに從ひ『泡』は谷一面と氾濫して來た。そして三月の末には劒岳の脊稜は未だ冬季の狀態にあるけれども、劒澤の峽谷近くは既に春の訪れがある事を示すものであらうか、春季の雪面に最も普通な古い濕つた雪質の雪崩が出た跡である。

『融解と氷結が毎日繰返へされつゝ雪は次第々々にその密度と重量とを增して來る。春の深く暮れゆくにつれ太陽の力は益々强調して、午後の孰れの雪の傾斜面も或る深さにまでは太陽の融解力で充分に飽和されて了ふ。此の古い濕度の高い雪が、非常な危險を持ち來たす。春季の大きな雪崩、歐洲で地底雪崩と云はれるものは、常に同じ場所に發生する。でその雪崩の或るものは春の還り來るが如く規則正しく發生し、又ローカル、ネームさへ持つてゐる』Arnold Laun "Alpine Ski-ing"

冬季の登山者として、初めて此の平藏谷を下る吾々は、其の不案内な峽谷と、兩崖の山坡にクレバ

スの入つた古い濕度の高い雪、しかも暖かい風の吹く午後、すべての條件が極度の緊張と恐怖を感ぜしめた。劒澤に出てからは殆んど雪崩の恐れもない粉雪の『海』がスキー家には安全な又愉快な、時には吹雪の避難所ともなるメーン、パスとして別山乘越まで續く。劒澤を登る時は月光が谷一杯に光つて、肉に喰ひ入るやうな寒氣と、蒼褪めた月光に滲んだ四つの影は、劒澤から別山へと動いていつた。雷鳥澤の凍雪に突き挿された二枚の木片も安全に再び主人の胸に抱かれた。月に光る雪路を、何も考ふる事もなく、思ふ事もなく辿つて。長いプロムナードの勞働から解放された時は、丁度私の夜光時計の針が九時を少し廻つてゐた。

## 雄山へ

三月卅一日。今日も亦、彌陀ヶ原から下は厚い雲が平原を蔽ふて、山山には明るい太陽が照つてゐた。雪に埋もれて畫も尙ほ眞暗な、靜かなスキー小舍の中に、頑固な寢床に横はつて、黃色いランプの光りを慈しみ乍ら昨日の勞働から釀された夢想と感激とが寶玉のやうに輝き、そのひとつひとつの懷しみを想ひ、何をなす事もなく半日を費した。

ひるからスキーを附けて午後のプロムナードに雄山へ向ふ。粒雪よりフィルム、クラストの方が登山には却つて勞力と時間が節約出來るので、淨土の蔭のフィルム、クラストを絡んで、殆んどキックターンする事もなく一の越へと登る事が出來た。雪の豐富な淨土への脊稜に反して、雄山へと續く脊稜は岩稜と這松とが露はれてゐる。それ故に雄山へと登る時には、スキーを一の越に脫して、クランポン用ふる程もなく容易に頂に達する事が出來る。頂上の小祠は乾き切つた岩角に風に曝されて建つてゐた。いつも其處から見渡される五色ヶ原の布を敷ひた樣な優美な丘陵と、藥師の雄大な山姿とは、今日も明確な輪劃を浮べて懷しい過古の印象と共に耐らなく慕はしい麗朗な愛と、禮讚の情に私を

驅つた。一の越から室堂への下りは、銀鼠の凍雪の表面を、二枚の木片は素晴らしい速度を以つて滑走した。それには殆んど五分も掛からなかつたらう。いつもスキー家の目も眩むやうな爽快味は、無數に描かれたスラロームの跡を見返る事である。

西方の青白い雪の地平線に、黑い孤獨な大日岳が暮れてから、スキー小舍へと入つた。至福と感激に充された數日間の立山のスキー生活も、今夜限りで、翌日は早朝から大日岳へ登り、その脊稜を西方へ下つて早乙女岳を越え、常願寺川の谷へと辿つて行くのである。數日間ではあつたが、雪の立山はその胸を開いて、その心に觸れしめ、吾々の山に向ふ深い愛を鼓舞し、すでに拒み難い權威にさへ惹き附けて呉れた。立山の冬の孤高の姿を想ひ、劒岳の孤獨を心に描いて、又數日の旅を續けた。

# スノードン (Snowdon)

## 八代　準

英國の名山 Snowdon に汽車で登る話を書くのは、恰も箱根山に電車で登つた話をする樣なもので、「山岳」の記事としては甚だ不適當である。而し日本に遊に來る多くの外國人が必ず日光や箱根に遊に行く樣に、英國に遊ぶ日本人で、少くとも山岳趣味のある人は此名山に遊ぶだろうと思ふ。本會々員の中にも澤山英國に行つた人があるから定めて此山に遊ばれた事と思ふが、「山岳」にまだ記事が出た事がない樣に思ふから一寸書いて見よう。それから自分が此記事を書く一つの動機は、英國內地

を旅行するのに、汽車の時間表 Bradshaw's Railway Guide を見ると、Wales 地方の停車場の名は殆んど何と讀んでよいのか分らない。無暗と子音計りが行列してゐて母音が殆んどない様な綴りである、英蘭人に聞いて見ても發音が出來なくて何と讀んでよいか分らないと云ふ。Snowdon は North Wales にあつて相憎此様な讀み悪い地名にぶつからねばならない地方にあるのだ。自分が Scotland の山地を遊び廻つた時に、「山岳」十三年二號に辻村伊助氏が Highland 地方の讀み悪い地名の讀方を書て置て下さつた御陰で、あまりまごつかずにすんだことがあるから、此記事も Snowdon に遊ばるゝ方々に何等かの御參考になるだらうと考へるからである。

大正九年四月六日 Liverpool に用事が出來たので Lodon を出發した、同地で用事の都合上中一日の暇が出來た、之幸と横に外れて Snowdon 見物に出掛た。

四月七日 Liverpool の地下鐵道で Mersey 川の底をくゞり、川向の Birkenhead に行き、Woodside Station で汽車の切符を求めるのに第一に困つたのは、目的地なる Llamberis を何と發音してよいか分らないことであつた、Baedeker の案内記を見ると Wales では Ll を Thl と略似た様に發音すると書いてあるので、出札口で Thlamberis 行の切符を下さいとやつて見ると、窓の中から Beg pardon と來た、之れはだめと見て綴を紙片に書いて見せたら、Oh! Llamberis と beris の所に馬鹿に力を入れて怒鳴つて漸く切符はくれたが、Llam は何と發音するのか遂に分らなかつた。

午後一時半 Woodside Station を出發し、Chester で Bangor 行の汽車に乘換へ、River Dee の干潟の様な入江を右に見て走る。此線は London, Holyhead, Dublin を連絡する Wild Irishman とか云ふ急行列車が走る線である。なぜ急行列車が Wild なんだか分り兼るが、此 Wild な列車なら至極結構である、而し Liverpool の様な横丁から出て來た僕の様な場合は多くは Local Train にしか乘れないから一等の箱でも汚なくて有難くない、箱の中には當歳位の乳兒を連れた夫婦者が乘合せた丈で

ある。

窓の外の景色があまり平凡なので、向側に居る乳兒に注意する、アウ〳〵と云ふて乳を呑みたがつて居る所は無邪氣で誠に愛らしい、日本の小供と全く同じ言葉の様に思へる、乳兒用語は萬國共通じやないかとも思つた。而し之れが少し成長すると追々卷舌になつて、吾人の小供とは全く遠ふ言葉を用ふる様になり、いろ〳〵の點で遠ざかつて行つて遂には人種的僻見を持つ様にもなるのかと思ふと可笑しくなる。

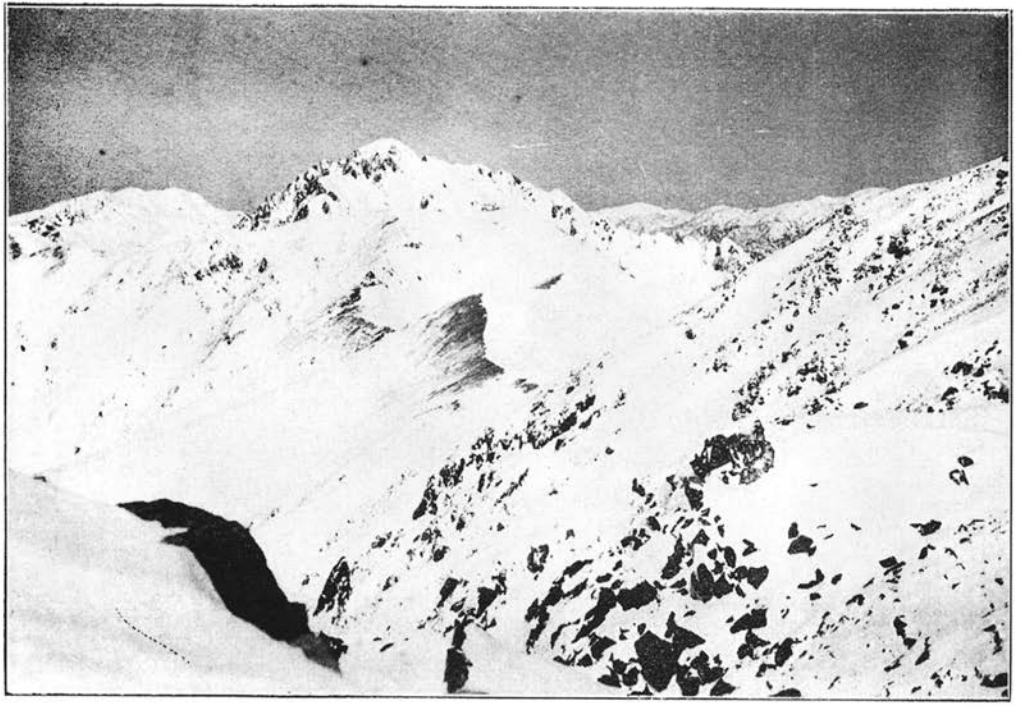
Rhyl で此夫婦者が下車すると入換つて二人の老紳士が入つて來た。此邊からそろ〳〵景色がよくなつて來る、右手即北の方は Irish sea の鼠色の水鼠色の空で甚だ物淋しいが左手は小山あり川あり林あり日本の海岸の様な氣がする、遠くに山又山も見えるので山國なる日本の海岸に似通つた氣分があるのであろう。青毛氈に紙屑を散した様にしか見えない羊の飼つてある英蘭の丘ばかり見て居た目、London に居つては精々 Box Hill 位しか見る事の出來なかつた目には甚だ愉快に感ずるのである。

あの山この川と名を identify するために熱心に Baedeker を見てゐると、一人の老紳士が Wales は始めてかと話掛る、始めて遊に來たので地名の讀み方が分らなくて閉口だと答へると、向に見えるのが Gwryeh(グリアハ) の Mansion だと城の様な建物を指して教へてくれる、いやとう〳〵始まつて來たぞと閉口する、僕が地名を口眞似るのだが中々出來ないので、老人は面白がつて車窓に見える景物の六ケ敷い名を云ふてくれる。やがて Colwyn Bay Station に着く、此邊は心地のよい海水浴場で今は時候外れで賑つてはゐないが立派な設備が整つてゐる、此地には Pwllyelnrochan Hotel (プヒョクロハン) と云ふ宿屋や、Llandrillo-yn-Rhot (サンヅリッヒョー) 等云ふ所があると六ケ敷いのを教へてくれる。

Colwyn Bay を過て少しく走ると汽車は Conway 川を渡る、此所で Snowdon の山々を背景として

川岸の岩の上に立つてゐる Conway Castle を望むのは中々よい、何だか中世紀の騎士時代を想ひ出す様な景色である、Conway Station は町を圍む城壁に接して居て一風變つた情趣のある停車場である、之れを出て暫く走ると右手の海上に Great Ormes Head の岬が見える、其山麓には Llandudno の町がゴチャ〳〵と屋根を並べてゐる、此所は North Wales 第一の海水浴場であると云ふことだ。汽車が隧道をくゞると前方に Anglesey 島と其尖端にある Puffin 島が見えて來る、之れから Bangor の間にも所々に城跡が見える、North Wales は馬鹿に城の多い所だと思ふた。

Bangor で再び汽車を乘換へて Carnarvon 行の列車に乘る、之れから箱中乘客は自分一人となつた、長い隧道を抜けると列車は Anglesey 島と本土との間の Menai 水道を右の方遙か下に見て走る、有名な Menai Suspension Bridge が右の方で水道を渡つてゐる、愛蘭連絡の列車が通る本線は之れより遙々と水道の方に下つて行つて、土木屋鐵道屋仲間では昔から有名である Britania Tubular Bridge と云ふ鐵管製の橋を渡つて Anglesey 島に行くのであるが、此橋も遙か下の方に二本の水道鐵管を渡した様に見える、汽車は暫く Menai 水道の景色を恣にして走り、やがて Carnarvon の町につく、古風な靜かな町である。こゝで三度汽車を乘換へ Llamberis 支線に入るのである、汽車が町と其後の小丘を半周する、此町にも亦城があつて吾々見物人が中世紀騎士時代の様な氣分になつてゐると、右手の小山の上に無線電信の架空線を張る柱の高さ三四百尺もあらうと思はれる偉大な奴が七八本天空を摩してゐるのが急に目に入る、之れで氣分が二十世紀に急轉直下してしまふ。此柱で太西洋横斷の通信をしてゐるので無線屋仲間には可なり有名な所だ。之れから汽車は Seiont 川に沿ひ何度も川を渡つて雜木林の中を縫うて走る、小川が音を立てゝ流れる靜な森林中の氣分は金峯の水晶峠邊の様だ、やがて眼界が開けて禿山が現れて來ると汽車は Llyn Padarn の湖を左に見て其畔を走る、湖の圍には Slate の石切場が澤山あつて禿山が壞れ掛けて居り殺風景な荒凉な景色となる、湖の向岸には石運びの鐵道が



五ノ越より見たる鍬岳(三月)　　伊藤孝一氏撮影

突の心配は絶對にない等と皆で笑ふ。Clogwyn du'r Arddu の崖も霧の中に過ぎて Criby-Ddysgyl の西側斜面を少し登つた所で汽車は積雪のため止つてしまつた。大正九年の冬は London には積る樣な雪が一度も降らなかつたので、僕は春になつて始めてこゝに雪を蹈んだ。汽車が此所に約三十分待つて居ると云ふので雪中を少し登つて見る、頂上も大分近いのであろうが霧で全く見當がつかない、少し登ると雪のために線路の Half Cutting が埋れて全く山の斜面と一所になつて居る、遂に頂上には達せずして發車時刻に汽車迄歸つて來た。

下りは汽車でも登りよりは早い、十二時三十五分には Llamberis に歸着した、本日中に Liverpool に歸らねばならんので、十二時四十五分 Llamberis 發の汽車で歸路に就た。

斯くして僕の Snowdon 遊びは失敗であつた、此山は英國の名山であるから澤山の書たものがある。Concise Guide, Baedeker の案内記等にも展望の Sketch 迄入れた詳細な説明があるから僕の駄文で打壞しをやる必要はない、而し話のついでだから次の寸丈を案内記から借りて書て置こう、此山は England 及 Wales 中で最も高く標高三五六〇呎、英本國中の最高峰 Ben Nevis より八四六呎低いが英國中で最も荒涼たる景色を有する山である、主峰は y-Wyddfa, Crib-y-Ddysgyl, Crib-y-Goch, Lliwedd, Yr-Aran の五峰に分れてゐる、名前は Snowdon だけれど雪線よりは約八百呎も低いから四月より十月頃迄は雪はないと書てある。

終に登山鐵道の驛長に敎へてもらつた此邊の地名の讀み惡いの丈を御紹介する、日本の假字では發音を正確に表せないし、短時間に聞き取つたのだから誤もあるかも知れない、而し Baedeker の案内記の初めの方にある Wales 語の發音の仕方の説明で照合して見ると大體よい樣であるから、「鳶の羽根」「虎の門の土手」式の發音でも後遊の會員諸君の御役には立つだろうと思ふ。

Y Wyddfa　ア、ウェヅアー　Crib-y-Goch　クリブ、ア、ゴホ

| | |
|---|---|
| Crib-y-Ddysgyl | クリブ・ア・ダスクル |
| Yr Aran | アール・アラン |
| Traeth Mawr | トライース・マウル |
| Silurian | シルリアン |
| Cwn-y-Llan | クム・ア・ラン |
| Clogwyn-du'r-Arddu | クロクイン・ディール・アル・ディー |
| Elidyr Fawr | エリダル・ヴォル |
| Carnedd Llewelyn | カルネド・ルウェリン |
| Tryfan | トルヴァン |
| Moel Liabod | モエル・ライボド |
| Llyh Llydaw | リン・リダウ |
| Berwyns | ベルウィン |
| Moelwyn | モエルウィン |
| Cader Idris | カデー・イドリス |
| Moel Hebog | モエル・ヘボグ |
| Ceunant Mawr | ケーナント・マウル |
| Llyn Teyrn | リン・テール |
| Mynydd Mawr | ムニド・マウル |
| Bwlch-y-Maen | ブルク・ア・マイン |
| Llyn Ffynnon-y-Gwas | リン・フニノン・ア・ガス |
| Lliwedd | リウエド |
| Capel Curig | カペル・クリグ |
| Nantlle | ナントラー |
| Cwm Glas | クム・グラス |
| Llechog | レチグ |
| Llyn Padarn | リン・パダルン |
| Carnedd Dafydd | カルネド・ダヴィド |
| Glyders | グリダー |
| Clwydian Hill | クリディアン・ヒル |
| Glaslyn | グラスリン |
| Nant Gwynant | ナント・グイナント |
| Arenigs | アレニグ |
| Cynicht | クニート |
| Lleyn | リーン |
| Llyn Quellyn | リン・ニエリン |
| Pen-y-Gwryd | ペン・ア・グリド |
| Cwm Dyli | クム・ディリ |
| Y Garn | ア・ガルン |
| Bwlch-y-Saethau | ブルク・ア・セイー |

尙案內記によると之等の名の部分には次の樣な意味があるのだそうだ。

bwlch＝pass. carnedd＝cairn. clogwyn＝precipice. crib＝crest. cwm＝valley. ffynnon＝well. llan＝church village. llyn＝lake. mawr＝great. moel＝bald. mynydd＝mountain. nant＝brook. pen＝top. traeth＝beach y, yr＝the. yn＝in, into. （終）

# 黑部別山と內藏ノ助平

沼井鐵太郎

此の二つの場所は、雪に輝く越の立山の東面に當り、早晩探らるべくして然も未だ何人も其眞を語るを得なかつた、所謂取殘された秘境であつた。

其の探勝を主要な目的として大正十年度の夏の旅は、稱名川の溪谷から大日岳に登る事に始まつた。同行は會員岩永信雄、小林文平の二氏、案內は例の長次郎で、人夫は長次郎の弟の岩次郎及佐伯竹次郎といふ二人であつた。そして大日岳から劍の三窓迄尾根を通つて、劍澤に下り、其の支流から黑部別山西方の乘越（二〇〇五米）に上り、黑部別山迄往復した。それから內藏ノ助平に下りて泊り、內藏ノ助澤の雪溪を登つて側尾根から立山の本尾根に達し、室堂に出で、以後順路を信州大町に出た。

劍の三窓から下つた次の日（大正十年七月二十二日）、私達は劍澤の岩小屋附近から澤の右岸を上に向つて三十分程歩き、山岳會編の劍岳登山地圖にハシゴ坂と記してある所の澤（後聞するに此は梯子谷と云ふ由）から、黑部別山の西方、二〇〇五米の鞍部に登つて行つた。ハシゴ坂といふ名は長次郎

では通じない。又彼には嘗て測量の際、四月の積雪を踏んで此の私の豫定路から黒部別山に登つた經驗が一度あるきりで、名前などは全然聞かれなかつた。澤の入口から富士の折立、別山とその間のカアルが眞砂澤の雪溪を通して眺められる。この澤は丁度劒の八峯が劒澤に面してぐつと膝を折り、亂杭齒の樣なピークの蔭から屈折した、急峻な狹い雪溪を下ろしてゐる丁度向ひにある。澤は入口から殘雪が埋まつて、それを私達は登つて行く。八峯はその凄慘な割れ目と錐の如き峯頭を段々に現はして來る。かうして二三町上る内には、又、北に當つて池の平の峠道や、飯場の小屋や、大窓の頭もあり〳〵と眺められる樣になる。澤の左側が一枚の壁になつた處から少し行くと、瀑にあたつたが、雪の多い今年は幸ひで、難なく登れる。すると澤が右によつて、その一町足らずの上の處から二分する。本谷は左に雪出をなして黒部別山の主峯の方へ向ふが、右の支流は地形圖で想像するより更に小さな澤で、雪もなく、傾斜がついて、水は潺湲として本澤の雪トンネルに流れこむのであつた。

此の澤の分岐點は地形圖で示されたよりも少し上の方でなくてはならない。これから本谷を溯つて黒部別山に達する事も出來ない事はなかつたらうが、登り付く所の籔が猛烈である事と思ふ。それに雪溪は雪の少い年、又は平年でも七月下旬以後は低い所であるから早く溶けて、危い空洞や大きな裂け目が多くなる事であらうと思ふ。

分岐點で寫眞の爲に十五分休んで、九時四十五分、水筋の右股の支澤を上り始める。その入口から五分位で傾斜は緩やかとなり、以後ずつと豫想外に歩き易い。殘る澤の凡そ半分（高距百米許）程登つて一度休んだきりで、十時半には尾根の上に立つ事が出事た。水がなくなつてからも、兩側の森林は、網を張つて邪魔する事もなく、後へは白馬の旭岳を見い〳〵、登つて行つた時間は十五分ばかりであつた。全く、この澤の上りが容易な事は黒部別山訪問の第一の有難みでなくてはならない。そして又、黒部別山はこの澤から登るべく自然の手によつて用意されたやうな所である。

此の鞍部附近には水も雪もないが、黒部別山の頂迄ヤブと奮闘する覚悟を要するので、第一回の中食を濟ました。鞍部には木が茂つてゐるが、内藏ノ助平の樣子は手に取るやうに分かる。内々心配してゐた平迄の下りも、ヤブが豪い丈で大した急さでもないらしい。地形圖の藏の字に當る邊に二つ許の雪塊が見え、その先に青い草原が見えるが、概して濶葉樹の林と笹の籔とで、只、内藏ノ助本谷の流を越した南側は、地形圖の記號通り、感じのいゝ草原になつてゐる。

十一時十分、荷は寫眞器、水筒、菓子の他は總て殘して置き、頂に向つて密林を掻き分けた。新しい熊の糞を見たりした。切明は不完全であるが濶量の際邪魔になる枝などを切り拂つてあつたので助かつた。私達の人夫も猛勇を奮つてあてゝ行つたから、今後は多少らくにそして間違はない樣になるだらうと思ふ。十一時二十五分一隆起の瓦げた所に來て、遺憾なく四方の景色をうかがふ事が出來た。先づ南方眼の下に淡綠のクラノスタ平を見る。其の南端の草原は前方に美しい黒木の林を列べ立てゝ中央には小流がうねつてゐる。クラノスタ本谷の河原と水は流石に大きい。平の落口は左右から山が閉ぢて其下部は最早下廊下の領域である。その眞上に赤澤岳、スバリ岳、針ノ木岳などが見え、それから右に草原の上空には、殘雪美しい黒岳、野口五郎岳を望み、更に右して立山の大汝峰から御前澤雪溪の一部が美事に現れた。黒部別山と富士ノ折立の峯を結ぶ尾根は黒くもく〳〵とした木山である。其右、西から北に向つて、劒の前山、平藏澤の頭、平藏澤雪溪、劒本岳、長次郎澤の熊の岩より上部、八峰の峻峯、其の雪溪及大窓の頭など劒の殆ど總てが壯烈な趣に現れてゐる。大窓の頭からは池ノ平と仙人山に續き、其から右して北面に、清水平から白馬の旭岳に續く夢の如く美しい山脈が見える。その右はもう黒部別山の肩に隱されて分らない。目指す頂の左下には黒い森の間に白瓦が光つてゐる。

私は屢々目慣れた山々を人知らぬ尾根の上から望んで、不思議な程麗はしいと思つた。一刻も早く

頂に登つてその大觀に醉ひたいと思つて、人夫を促し、其處から針葉樹の香高い間を通つて行つた。尾根は少しく左に折れて下り氣味となり、再び同じ方向にけはしく上つて行く。其處からが最後の長い上りである。此時黒部の方から東澤のま上を雨雲が走つてゐたが、その影響は忽ち此山にも及ぼして、一しきり霧小便が降り注いだ。其處で十分許木の上に腰かけ、枝間に劍の大岳を見上げ乍ら、霽れるのを待つた。水滴が切れて、再び登つてゆくと、ミヤマハンノキの根にオニクが澤由付いてゐるのを見たりして、岩の露出した森の中を攀ぢ登る樣になる。其が復たヤブになつて、然しもがく程の事はなく上へ〳〵と進んで、ひよつこり休場によい空けた窪地に出る。其上は一寸惡いヤブであつたが直きにぬけて緩やかとなり、譯なく頂上に出られた。私達は午後一時半、即ち乘越から一時間二十分で黒部別山の嶺上に立つたのである。

由上は流石林が杜絶えてゐる。其處には誰かが作つた樣な石のテーブルがあつたので、私達は身を投げかけて、先づ第一に黒部本流の水を眺めた。それは冠氏の所謂別山澤の落口附近である。上流から河身は僅かに西に曲つて、直ちに東寄りにかすかにうねり廻る所である。その水の躍如たる姿、青みの色、そして對岸の白い險崖は充分に登山者の胸をひきしめる。更に北に進んで黒部側の崩れの緣なる岩に登つてみると、流は一層大きく見える。

私はなほ、黒部川を形を換えて見やうと思つて、北の隆起（最高峯、三角點なし）迄進んで行つたが、終に見えなかつた。も少し時間の餘裕があれば劍澤寄りの三角點の峯（二二八四米）迄行つて、絶壁の上に立ち、下廊下の偉觀と劍澤の險絶な姿を眺めたかつたものである。長次郎に聞くと、劍澤若しくは本流は其處へ行つても、餘程下におりて樹にでも登つて見なければならないといふ。そして彼が嘗て死を賭して半日も崖へづりをやつたといふ處も黒部別山の北側、劍澤を覗く方面である樣な話し振りである。さもあらう、大正八年の八月、棒小屋澤落合の稍々下手から對岸劍澤を傾望した時

に、私は黒部別山側の大崩壁に目が昏んだ位であつた。

話が前後して谷の奇觀ばかりに氣を、いや筆を取られてゐたが、今は山上の模樣と眺望の面白さを說かなくてはならない。

黒部別山は地形圖に見る如く、南北に細長い山稜を有してゐる。其主峯(最高峯?)は中央の二三二六米の高點(此は隆起が著しくない)から大約五百米の距離にある。それから北に進むと一旦低下して擡頭するのが二二八四米の劍澤寄りの頭である。又、中央から南するものは東方に觸れて聊かカーブし、二三〇〇米のクラノスケ澤寄りの頭と其手前に一峯を崛起してゐる。この首尾兩端の峯は私の不知であるから、語るを得ないが、總じて中央の高地(假に二三二六米の附近から二三二〇米の圍を有する主峯高點の附近迄をひつくるめて稱してをく)に比すると森林が密であるやうに見える。(勿論三角點のある小區域はいゝ所には遠ひなからう)。そして中央の高地は豫想に反して感じのいゝ所であつた。山上はどちらかといへば平の斷續した所で幅も相當にあり、西か東かに必ず柔かい草地が緩傾斜をなして、美しい花も少からず咲いて居る。その上に腰を下ろして四圍の大觀をほしいまゝにする事は誠に行樂の極みであつた。峯の木立は一體に兩側に多いが、それは又うまいあんばいに配置されてゐるので、劍立山方面を見るには大して邪魔にはならない。却つて主峯高點の南側から綠の濃い針葉樹を前景にして劍を眺めるのは眞に絕景である。その有樣は後立山々脈の新乘越の景に比して更に莊重な神韻にみちてゐる。も一つこの山上で都合のいゝ事には、所々方々に殘雪を藏した窪があり、其側には往々四方とも防風の土堤と林が取りまいた、好ましい野營地がある事である。此丈の材料を列べて、私は黒部別山訪問を諸君におすゝめしたい。そしてその山自身のよき姿及び展望臺としての比類なき價値を更に確證する爲には、是非共嶺上に快き一夜を明かされなくてはならないと思ふのである。

午後二時五十分下山の途につき、登路をバックして三時四十五分に鞍部の乘越についた。おくれたものも四時には揃つた。この上下は總計三時間と見るのが普通であらう。

私達は急いで第二回の中食をやつて、午後四時二十分、クラノスケ平を目がけて藪の中に入つてゆく。木立はすいてゐるが、傾斜一めんに親指程の根曲笹が生えてゐて、身體は忽ち其内に沒してしまふ。十分餘もさうして半ば滑走し乍ら下つてゆくと、長次郎は巧みに細いカラ澤を見付けて、そつちへ跳び移つた。その窪なら笹もうるさくない。と思つたのは早計で、竹軍は再び包圍攻擊を始める。が、段々に上の樣な猛烈さは失つて行つて、四時四十五分、稍廣い澗澤に出る事が出來た。その澤は乘越の東の方から出てゐるもので、私達は運よくも短時間で殆ど平の北端に達する事が出來たのである。けれど更に之を傳つて行くと、兩側の藪は終に切れる時はなく、澤の方向は次第に左に屈曲して、斷崖が扉のやうに閉ぢたクラノスケ谷の落口の方に向つてゆく。澤そのものは潛流にでもなつてゐるのか、一滴の水もない。砂地には今通つたばかりと思はれる熊の足跡が頻々として見當る。(この行では終に一匹も見なくて殘念であつたが、芦峰の獵師が毎冬この平で熊や羚羊をとるのも尤もな事だ、四方山に遮られた獸のよいノタ場である)。餘り下つても損なので五時十五分になつて、磧に離れ、右手を分けると間近に人間よりも丈の高い草原がある。大イタドリやシヽウドなどの大草本にまじつて櫻の若木などが生えてゐる。甘酸つぱいそして重苦しく鼻を擊つ草の匂はいつもの散歩道(日本アルプスの常道)ではない事を告げる。熊の寢跡と見えて生々しくも草の踏みにじられた所もあつた。

五時三十分、草原をはなれて上りにかゝり、疎林の間を、時には獸の道を拾つたりして、クラノスケ本谷の方に斜かひに近づいてゆく。疲れてゐたので大分長いと感じたが、やがて滔々たる水音が聞え、涼風が颯と吹いて來る。草からぬけてたつた十分の後である。私達はクラノスケ澤の奔流の左岸

梯子谷の雲渓　　小林文平氏撮影

に出た。水際を傳ひ、岩から岩へ徒渉したりして上ると、もうクラノスタ雪渓の下端に近づいて來る。其處は既に平の領分をはなれかけた所で、水は激して岩を擊ち、河床の階段を刻みつゝ氷冷の流が躍り狂ふ谷の源であつた。右側のヤマハンノキの林の中にいゝ場所があつたので其處に天幕を張る事にした。それは午後五時五十分の頃であつた。

此が私達の歩いたクラノスタ平である。豫想した通り草木の繁茂した平である。それは寧ろ二三月の頃獵師について遊びに來る所であると思つた。

二十三日。午前二時頃から雨が降つた。五時に起床した時も少雨であつたが、今日は何でもかんでも室堂へ出ないと米が無くなるので、覺悟してゐたら、好いあんばいに八時頃になつて上つて呉れた。しかし今日は此迄になく霧の旅である。

九時四十分に出發して直ちにクラノスタ澤の雪渓にかゝる。雪渓は下端の幅三十間許で少し上ると左に曲り、それは又一二町で右に直つて傾斜を增す。その曲り角の南のなせな尾根は御前澤に到る乘越然たる所である。此附近にダケワラビが澤山生えてゐる。出發から十五分にして其のまつ直につゞく大雪渓の上端に達して、南側の緣で休む。野營地のあたりから、クラノスタ雪渓の上部は曲つてゐる爲によく分らないが、その支雪渓で恐ろしく急な一條の白道が直上に見えた。私の考へではそれを登つて側尾根に取りついた方が早く行けさうに思つたので、本谷の雪渓から眞西に向つて少しく上り、稍〻急な草尾根（島といつた方が適當かも知れない）を越えて、其の急雪渓の下端に出た。此邊は地形圖を參照するとどうもはつきり分らないので、私の眼も疑はれるが、又地形圖に示された崖の記號や等高線の伸び縮みが少し變である樣に思つた。兎も角、私の志した急雪渓はクラノスタ本谷の雪渓と瘠尾根一つ隔ててあるもので、野營地の一寸上で（標高約千九百乃至二千米）本谷に合するが、中央は大部長い間雪が消えて、飛瀑をなしてゐるものである。

急雪渓の下に來て休んだのは午前十時四十分で、それから私達は右手の草地と雪渓の境を十分許のぼり、十一時十五分といふ時刻に、金カンジキをつけてステップを切り始めた。それは全體の長さの三分の一許上つた所である。雪渓の幅は五間未滿で、兩側はもう立壁になつてゐる。傾斜は中々強く、此日私は始めて草鞋を用ひたが、金カンジキ（大正五年大町製）丈ではなほ不安なので、懸命にアルペンストックを打ちふるつて足がゝりを作つて登つた。他の者は私の後から長次郎が先頭で、岩永君のアルペンストックを借りて段を付け乍ら、ロープで珠數つなぎになつて登つて來る。雪渓は先づ劒の澤にも連續的には斷じて見ない樣な急さで、しかもそれは狹く下が岩だらけで悪いので、隨分と危險を感じる。傾斜が稍〻增した所では、どうしてもまつすぐ上を向いては立つてゐられないで斜にやつと踏路をこしらへる事もあつた。此時ばかりは長次郎の溫和な顏もひきしまつて、注意をあたへる事を怠らなかつた。（全く彼は悪場に來て始めて其眞價を發揮する、平常は平凡な山男である）。

其内に雨が降つて來たが、其時はもう雪渓も上端の二股に來て、私達はまつすぐ右の本筋を、波形を頼りにする丈に登り得るのであつた。

正午十二時、私達は富士ノ折立から黒部別山を派出する尾根の一點に立つた。それは二千六百米の圏内で、ふか〳〵した假松がマサゴ澤に面してはびこつてゐる所であつた。私達は前面にマサゴの雪渓や、別山、劒、少しく離れて白馬岳と近くの黒部別山等を眺めて、自らの位置を確かめる事が出來た。かうなると第一、人夫達が元氣になつて、ろく〳〵休みもせず、今度は長次郎を後にして、岩次郎が先達振つて假松を乘り切り、高みの方へ登つて行く。この尾根は測量の際に歩いたものと見えて切開も容易に見付けて行く事が出來る。マサゴ澤に面した斜面は假松の藪で傾斜も山としては普通であるが、クラノスケ谷に面した方は嶮岩屹立して上下に困難な所である。私どもはやはり運が好かつた。もしあの急雪渓を恐れたものなら、クラノスケ雪渓の殆ど最後迄長い雪道を踏まなければならな

い。（其のいづれが得策であるかは、私として比較する事が出來ない。私の行つたすぐ後で木暮さんが矢張長次郎を連れて本谷を大汝の邊から牛分程下りられたさうである。）途中で一寸した休場があつたので中食をとる。其處にはどの岩といはず、べつたりとイハブスマが生えてゐて、丁度霧にしめつてゐるので、らく〳〵としこたま採集したりした。この岩を過ぎて次からはもう尾根の上は廣くなつて登行もずんずん捗つた。其頃から風が烈しく吹いて來出したので、私達は午後二時二十分に本尾根に着くと、雄山へは向はず直ちに別山乘越（長次郎等のマサゴ乘越）に下りて、一の谷の源の方へ向つて行つた。そして立山室堂に着いたのは午後三時半であつた。（終）

# 阿蘇・九重・由布を巡登して

竹内亮

## 一、はしがき

九州の山々に就ては既に「山岳」誌上に於てもいろいろ記述が試みられ、殊に最近に於ては第十三年三號の八代準氏の可成廣汎な範圍に亘つた記事や、十四年一號の吉岡八二郎氏の阿蘇と九重とを主にされた記事等があつて、略盡されてゐる觀があるが、自分は昨年（一九二二年）十一月阿蘇を振出しに九重山群の一部を登り、更に由布の頂を極めて別府へ出た。

其の當時の行程をかへり見て少しく私觀を記して見ることにする。

此の旅行の前に九州の山を登つたのは、福岡附近では背振山、寶滿山、若杉山、三郡山等で、少し遠い處では英彥山、溫泉山等であつて、中部以南の山々については未だ全く智識がないことを御斷りして置く。

兎に角この北九州の代表的の山々では、殆んど山としての價値をもたない山が多い樣で、要するに一の遊山地で、重いリュックサックを背負ひ上げるのはむしろ肩身がせまい位の山であるが、今茲に記さうとする三つの山々は、少くともリュックサックを背負ひ上げても、さう肩身の狹い思ひをしなくともすむ丈の山だと思つた。

## 二、旅行日誌略

十一月六日。晴。午前九時三十七分箱崎驛發の汽車で出發、熊本にて宮地線に乘りかへ、午後二時過ぎ立野驛に下車、栃の木溫泉泊。

十一月七日。曇。午後三時頃から雨。栃の木から湯の谷を經て阿蘇登山。中岳の火口原を南に廻り、東部外輪の絕壁をからんで午後三時高岳の最高點を極め、下山は中岳の外輪を北に傳つて、再び火口の緣に出で、本堂前の茶屋に一泊。高岳の頂上から雨になりシャツ迄ぬらしてしまつた。

十一月八日。雨。風雨の中を十一時頃山上の茶屋を發し、中岳の山腹の小徑を經て宮地へ下山一泊。雨終日やまず。

十一月九日。曇。午後から雨。宮地から古城村手野を經て阿蘇の北大外輪の急斜を登り、原始的高原を橫斷して九重山麓の瀨の本に一泊。午後から雨甚しく、且寒氣急に加はる。

十一月十日。雪。遂に雪になつた。瀨の本から獵師山の東方の峠を雪をふんで登り、吹雪の中を更

に山稜を東に傳ひ、俗稱立岩から一氣に北の斜面を下り、寒の地獄に一泊。夕方晴れ新雪の山容壯觀を極む。

十一月十一日。晴。寒の地獄から硫黄製練所を經て硫黄礦山を一瞥し、左折して三股山の南の鞍部に出で、蒼火口趾に入りて久住山を登り、更に東に山稜を傳ひ、大船山麓に下り、西面より大船山頂を極め、三股山の南の山路を辿つて寒の地獄に歸泊。途中全く日を暮し、一時徑路を失つて苦んだ。

十一月十二日。晴。寒の地獄より千町無田を經て小なる峠を越え、硫黄礦山の新道に出で、小田野池附近を經て由布院の溫泉鄕へ到り一泊。

十一月十三日。晴。由布岳を上下して別府觀海寺溫泉に到り一泊。

十一月十四日。曇後雨。別府より乘車箱崎歸着。

## 三、阿蘇山

阿蘇山へは栃の木溫泉から湯の谷を經て登つた。栃の木溫泉は白川の峽谷鮎返りの瀧の直ぐ下流にある溫泉場で清冽で豐富な湯量は心地のイ、ものだつたが、待遇の惡いことは甚しかつた。

湯の谷は阿蘇山腹の爆裂火口から引いた溫泉場で、旅舍が一軒ある。こゝから急なスゝキの多い斜面を登つて、烏帽子岳と杵島岳との鞍部に出ると俄然展望が開け、前方には黑褐色に裸出した高岳と中岳とが直下の千里ヶ濱の草原を距てて手にとる樣に望まれた。又大阿蘇の大陷沒火口の規模は殆んど其の西半の全容を盡すことが出來、殊に北部の大外輪の高原の眞一文字な外觀と、南西部の連山性な外觀との對照は興味深く見た。

中岳の噴烟の貧弱なのには全く想像がうらぎられてつまらなかつたが、火口壁の內面の熔岩の層理の美觀は素敵だつた。それからこゝの火口原の南部の平地で微細な火山灰が風に吹かれて黑烟狀をな

して山上を荒れ廻る景色は物凄いものだつたし、處々に多數の小さな圓頂の砂丘が最早カサカサに枯れたイタドリをしがつかせて見られたのは大變興味をひいた。

高岳へは中岳の外輪山の絶壁の南緣を登つて行つた。この上部に砂岩層が露出して居た樣に見られたが、砂岩だとすれば面白いことだと思つた。溶岩の流れたままの原形を留めた斜面を少しく登ると高岳の三角點だつた。怪奇異者の姿の根子岳はここからでは可成小柄に眼下に見られた。

頂上では今迄怪しい空模樣が遂々雨になつて、根子岳の寫眞をとると大急ぎで下山した。

下山は中岳の外輪山の北緣を傳つたが、途中で一寸路を失して直立した岩壁を無理に下りかけて中止したが、下からその絶壁を見上げた時は身ぶるいがした。もう一度中岳の火口緣に出て御堂の前の茶屋についたのが午後五時。雨は益々ひどくなる許りだし、日も暮れたのでこゝに泊めてもらふことにした。

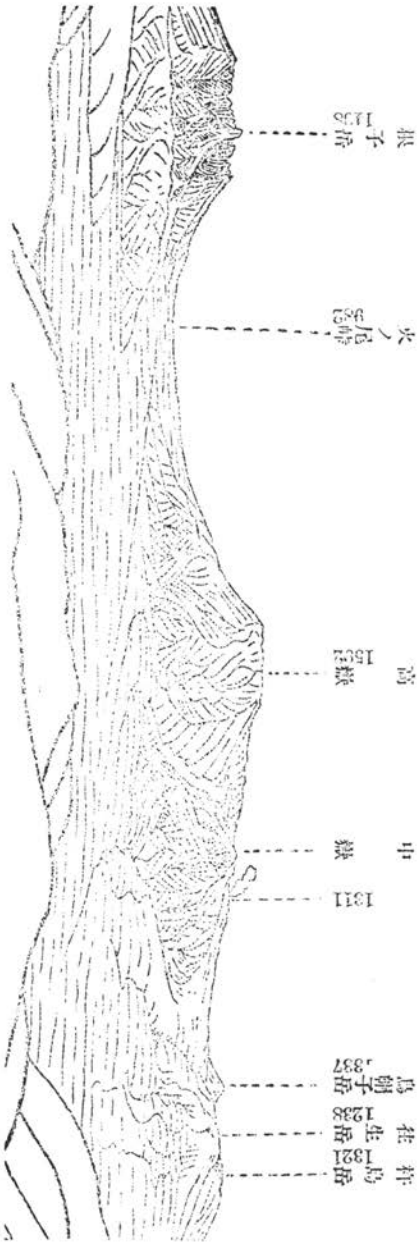
翌日も雨と濃霧の中を宮地への降路をとる。小徑は中岳の裸出した斜面を横にからんで高岳を眞上に仰ぐ邊から急に下りになる。天氣がよかつたらこの邊から根子岳のスバラシイ山容が望まれるさうだつたが勿論そのよすがはなかつた。

兎に角阿蘇は火口迄は極めて容易に小學生でもブラブラ登つて來られて、しかもその中腹以上の裸出した景觀は幾分可成な高山の氣分をもたらすし、殊に展望の雄大な點は全く素敵だと思つた。

## 四、高　原

宮地の町を離れて、よく耕作された大火口原を北に約一里許り行つて古城村の手野から溪流に沿つて大外輪の斜面を登ると其の上は素晴らしい高原が展開する。高原の表面は殆んど平坦で、その間に淺い概して無水の谷が無數に走つて居る、人烟の稀なさびしい處だつた。

行けども行けどもほほけた尾花の波打つ草原續き、稀にかしはの矮樹が點々して居る極く瘠せた土地で、耕地は谷間に僅か許り見られる丈である。處々に美しく草が刈られて小屋形につまれてゐる。その悠々せきらざる景觀はどこか北海道の十勝邊の高原を思はせるものがあつて、たまらなくなつかしかつた。




行手には九重の山群を、後には阿蘇の山々や祖母岳一帶の山々を連ねて高原の一端を限つて居て、どこかだらけ氣味の地形に壯嚴なしめくゝりを與へて居る。

大きさと淋しさとの連續を唯一人、小供の時に讀んだいろいろな御伽の世界を幻想に浮べながら、何とも云へない涙ぐましい感激にひたつて北へ北へと、ともすると消えがてな小徑を辿つた。

高原の盡くる處に瀨の本の一小部落がある。竹田から宮の原への縣道筋で、昔は强盜村で旅行者を

掠めたものださうだが、今は純朴な山村で春秋の林區署の造林其他の山地勞働や乏しい畑地と僅かの牧畜とによつて生計を立てゝゐるらしい。

高原の路の午後は又雨だつた。その内に風も加はりやがて急に冷氣を增して來て、ときどき雨に交つて霰が草原にたばしつた。

こんな日に九重への峠をこすのもつまらなかつたので、瀨の本の老人夫婦が營んでゐた小さな茶屋に其の夜を厄介になつた。

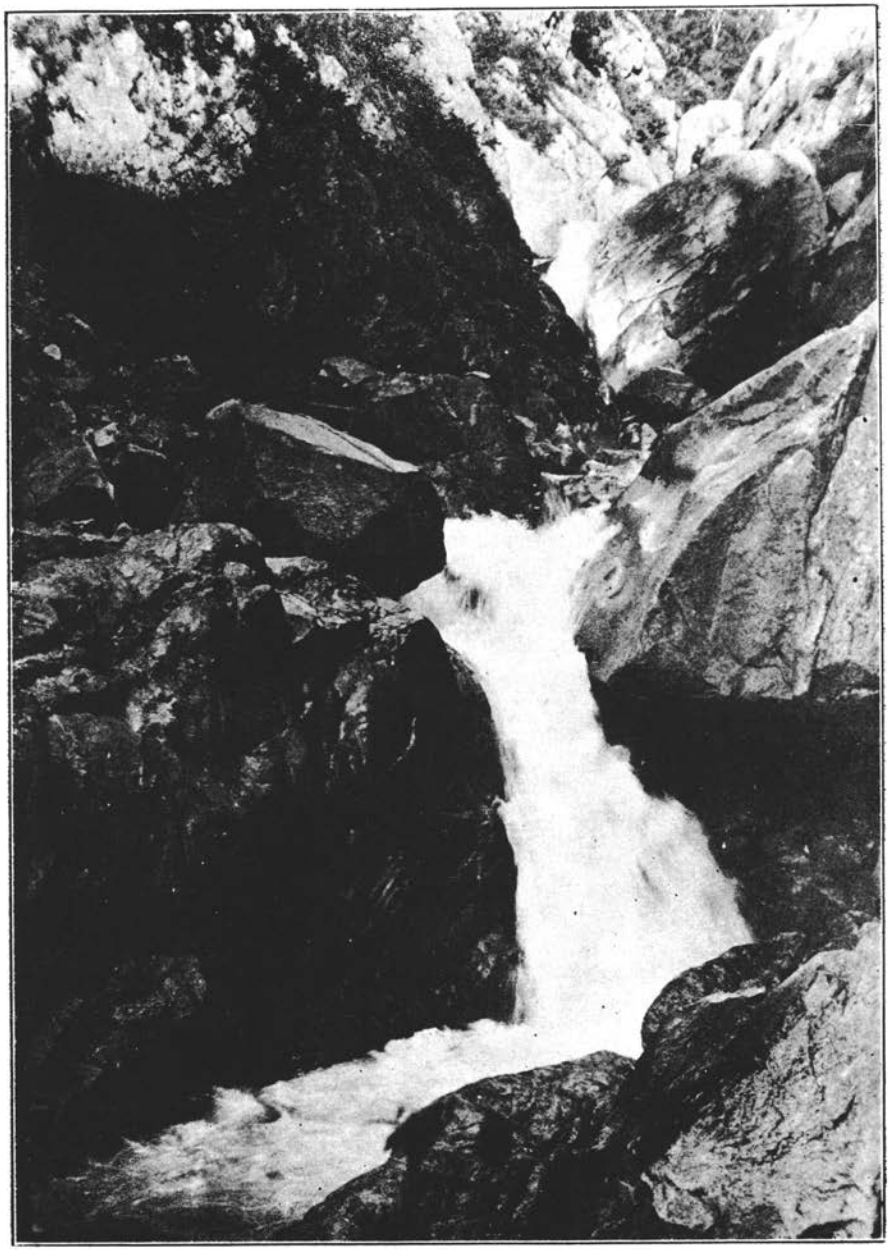
## 五、九重山及大船山

獵師山の東の鞍部の雪をふんで、右手の斜面を九重から出た尾根を吹雪の中に辿り、俗稱立岩といはれる小さな峯から一氣に北の斜面に下つて、寒の地獄冷鑛泉の旅舍の唯一人の御客さんとして、炬燵にもぐり込みながら晴れ行く雪の三股山のスバラシイ姿を仰ぎつゝ不精な夕食をすませて寒い外に出た。

近くの高い峯々から遠く崩平山、野稻山の一群をこえて、由布岳の尖峯にかけて皆雪に被はれて西日に映える大觀は、忘れられないものだつた。

寒の地獄鑛泉は九重の北麓の小さな谷間の一枚岩からあふれて湧き出る清冽な手も切れる樣なつめたい鑛泉で、其の湧出する岩をえぐつて浴槽にしたものである。神經性疾患、婦人病、花柳病、皮膚病等に特効があるとかで、夏はずい分こみ合ふさうである。自分は話のたねにと思つて夜一寸つかつて見たが、つめたくて一分とは入り切れなかつた。それでも冬は餘程暖かですとは宿の主人の話である。

寒の地獄の第一夜は非常な寒さに明けて、朝は鑛泉を除いて殆んどすべての水分は氷結してしまつ



御前澤　　西堀榮三郎氏撮影

て居たが、天氣はスッカリ晴れ渡つて、一點の雲もない勿體ない位の登山日和だつた。

往年の山崩れのあつた名殘の大きな河積地の細道を辿りつゝ硫黄製練所を拔けて硫黄搬出の板敷の小徑の霜柱を踏みしだき乍ら、盛んに噴烟してゐる硫黄礦山迄登つたが、石小屋から突然出て來た坑夫にどなりつけられて、こんな手合を對手にも出來ず、サッサと岩の斜面を左に逃げて、三股山の南の鞍部に登り、更に右手の狹い岩の尾根を登つて見たが、下の千里ヶ濱火口趾へ下りて更に登つた方が久住山へ行くのに都合がよささうなので、又戻つて下の火口趾に下り、その溪間を登つて尾根に出で、殆ど膝迄の雪を踏んで九重山群の最高點久住山に立つた。頂上は岩石の磊々たる馬背狀で、一等三角點の石標と風雨にさらされた櫓の殘骸とが見られた丈であつた。頂上は一七八八米の高度を有する九州の最高點丈にその三六〇度の展望は素敵なものだつた。殊に阿蘇の全容を盡くし得ることは特筆すべきものの一つであらうと思ふ。

陸地測量部の五萬の圖の九重山はむしろ山群の名稱で、寒の地獄溫泉の主人は星生山と呼び、最高點の久住山を九重山と呼んで居た。農商務省地質調査所の日本西南部地質圖幅には星生山及久住山が記されて居て、九重の名稱は山群に與へられて居る。自分はここでは陸地測量部の五萬の圖の九重山を星生山とし、久住山をそのまゝにして、山群に九重の名稱を與へて記載することにした。

九重山群の主要部はこの星生山と久住山との高度殆んど相伯仲する峰々と、その外に猶三、四の餘り高度の差のない小峰の一群と、その北に三股山（一七四五米）東に大船山（一七八七米）平治山（一六四三米）黑岳の一群の三群から成立して居て、その星生、九重の一群から更に北西に一脈が延びて涌蓋山（一五〇〇米）で終る山群が附屬して居る。

九重山から下つて西に尾根を傳ふと底に草の生えた岩塊のくづれ落ちた斜面を持つ小火口趾の上をからみ、小さな斜面を登ると岩礫の堆積した岸にかこまれた小さな靜かな池に出る。其の日は表面は

薄く結氷して居た。北麓の田野地方ではこの池のことをイカラヅの池と呼んで居る。雨乞には中々靈驗あらたかな池だといふことであつた。又この池にお賽錢をほふり込むと皆いつの間にか岸邊に上つて來るさうだ。

イカラヅの名の起りについて田野の人の説明によると、昔源頼朝が富士の卷狩をするについてその方法を熊谷直實を使節として阿蘇の宮司から傳授を受け、熊谷はその實習を第一に手近な九重山で行つて猪、鹿、狼等の獲物を得て、その罪滅しに山麓に猪鹿狼寺を寄進したに由來するのださうだ。

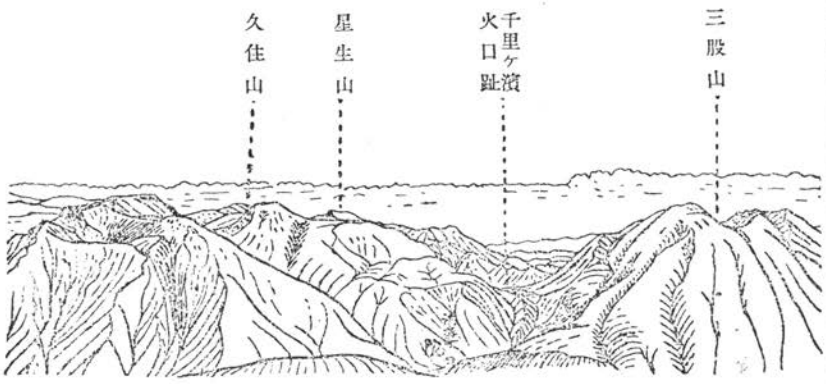
この池の西に聳ゆる家屋形の小峰を攀ぢて、谷一つ距てて大船山がそのアツトラクチヴな全容をさらけ出してゐるのにたまらなくなつて、急に大船山に登り度くなり、急斜面の雪と草原とを一氣に辷り落ち、谷に落ちこんで一時石楠の藪くぐりに可成困難して、どうにか大船山麓の草原に出た。

ここは田野方面から久住へこす山路で、雨期には一時的の湖水になると云ふ凹地を下に見る處だつた。昔は山伏の坊舍の榮えた法華院もすぐこの近くの三股山よりの千里ヶ濱舊火口の火口瀨の谷間にあつて、今は唯一軒殘つてゐる坊舍は溫泉宿を營んでゐるさうだがよつても見なかつた。

ナダラカナ草原の斜面を少し登ると處々に濕地のある小臺地に出て、臺地が終ると急な斜面が一氣に大船山上の舊火口趾の緣へ續いて居た。

夏は放牧の盛な處らしく、一面に牛馬の足跡にふみ荒らされて居て、小徑が無數にあるので一時間餘りで難なく登ることが出來た。この邊にはクサボケが多く見られた。九重山麓ではダケウメと云つて、梅干と一緒に漬けこんで茶受代りにして居た。

火口趾は殆んど完全な圓形で、非常に壯大なものであつて、內壁は樹林と草原とに被はれて居る。この火口壁の南部は樹林に被はれた槍狀の岩峰で大船山の最高點をなし、北部は可成廣い草原性の高臺地で小さな淺い池が望まれた。




この最高點の岩峯の頂上には僅かな平地があつて、風雨に曝された高さ三尺許りの石碑の三つにこはれて横はつて居るものとその臺とがあつた。碑には何か文字が讀まれたけれど讀む氣にもなれなかつたが、慶應三年の年號丈一寸眼にとまつた。この岩峯の東直下にも小火口湖があつて其の日は水面は氷結してゐた。

寒の地獄での話だとこの頂上に竹田の舊藩主の廟所があつたのだといふことだ。

山上の眺望は西に久住山、三股山を盟主とした一群が近くせまつて居て、其の概覽をするのには絶好の位置である。其の他の三方は可成り展望がよく、殊に東部の竹田一帶の高原の全景を收むることが出來る。

大船山の北東に續いて全山樹林に被はれた黒岳が望まれる。この山は非常に險阻な山で古來入山したもので生還したものがないと傳說されてゐるのださうだが、自分の知人の談によると中々植物の種類の興味のある山だといふことであつた。

阿蘇から九重を經て由布へ出る間の高原地帶は、概して樹林の少ない草原地で、樹林は僅かに谷間に貧弱に見られるのみであつて、九州中央部草原地帶とでも云つて區別して見たくなる特異の植物景觀をもつて居るが、この景觀には第一次的のものと第二次的（人爲的）のものとが區別出來る筈で、この九重山群の大部分に樹林が少

ないことは勿論第二次的のものであるさうである。

元來九重の山々は實に美事な樹林に被はれて居て、其の山頂部附近に僅かに岩石の露出した部分があつたのみであつたさうであるが、硫黄礦山の隆盛になるにしたがつて樹木が次第に枯死して來て、それを片つ端から伐採してしまつたものだと云ふことである。實際三股山の硫黄礦山に面した斜面などには直徑二尺位の古い切株が見られる處を見ると、略其の森林の往時の景觀が想像出來る。この三股山は少くとも三十年位以前迄は實に絶好な猪獵地だつたといふことである。

この亂伐の結果は後年の大山海嘯となつて九重の北麓の一部に大災害を來たしたものである。

九重山群で自分にとつて大變面白かつたことは、九州でこの山中に限産するコケモモの分布であつた。三股山へは登らなかつたから知らないけれども、コケモモは星生一帶の山中では約一三〇〇米以上の高地に、イハカヾミと共に實に豐富に茂生して居る。しかし大船山では全くそれが見られなかつた。この事實はこの火山群の起原及發達について趣味のある事實を提供するものではないかと思ふ。

大船山を下つて法華院一帶の廣々した處々にミヅゴケの生えてゐるジメジメした谷間の草原を通つて、三股山の北側の小徑を通つて日がトップリ暮れてから寒の地獄に歸つた。この途中三股山の谷の落葉闊葉樹林で、落葉を踏んで夕暮れのさびしい山路を通つた時の、どこか軟らかな手で壓迫される樣な氣分は、忘れられないものであつた。寒の地獄の下方の大きなヨシの濕地に出た時は可成日が暮れて、一時どの方面へ行つていゝのか方向を失つてしまつて困つたが、とにかく無事に道路に出ることが出來た。

## 六、由布院の溫泉鄕及由布岳

九重山麓から由布院の溫泉郷への道は、高原性な山地に最近九重の硫黄礦山で作つた立派な運搬路がある。この道は崩平山の西側の山腹をからんで小田野池の直上に出で、野稻山腹を横ぎつて川西村に下つて居る。

自分は寒の地獄から九重の裾野をヨシブ、千町無田の部落を經て小さな峠を登り、崩平山の東部で先の道路に出た。高原の一端には涌蓋山の圓錐形な姿が非常に眼を引いて聳えて居た。

千町無田の部落はこの山地では珍らしい肥沃な平坦な盆地で、約二〇〇町歩以上に亘る整然たる耕地が見られる。北海道の平原村の樣な直交式な道路と、それをはさんだ家々の周圍には杉の風防樹が美しく植ゑられて居た。田は未だ刈入れ時で人々は忙しさうに野良に出て居た。

この部落の起原は傳說的にはすでに神功皇后の時に朝日長者の住居であつたと云はれて居るさうであるが、開墾の事業は明治の初めに久留米の人青木氏が土地の拂下を受けたのに初まるさうである。

小田野池は湯の平溫泉の上部の山地の小山地にたゝへられた淺い池で、その西に續いて山下池があるが、この方は水量もズット少なくて、底の大部分が干上がつて居た。この樣はこの池と共に由布岳の山容を近く仰いで一種の風致のある處である。

小田野池をすぎると山路は急に下りになつて、右手に深い谷底に奥江の部落を望み、落葉闊葉樹の多い斜面を横切り、間もなく高原地を終つて道路は谷に入り、由布院盆地の入口の川西に導れた。川西附近は丁度大分からの鐵道工事中で可成賑つて居た。

由布院は由布岳の南西麓由布川をはさむ廣い盆地で、到る處溫泉が湧出するので可成知られた地であるが、今迄位置が不便であつたため、近くに別府溫泉の大發展があつたに似ず、こゝでは溫泉地としての設備等は多くは依然農閑期の近村の御客さん向きに止つて居て、それ丈未だ純朴な處が多い樣

であつた。

この盆地からでは由布岳が間近くスバラシイ仰角で其尖峯をもたげ、森嚴を極めて居る。

自分は盆地の南側の小高い斜面を通じて居る縣道筋の溫泉宿に泊つた。こゝから下の盆地を望むと夕方の冷氣が增すにつれて、水蒸氣の多い土地は次第に白い霧に包まれ、それを通じて淡い電燈の光りが美しく輝く景色は、何とも云へない氣分だつた。

殊に朝は一帶に厚い霧に包まれ、それが次第に上から薄らいで行つて、思ひがけない高い處に由布の尖峯が朝日を浴びて頭を出す。やがて霧は刻々に上からはがれて、最後に盆地の底に厚く停滯して下の村々をしばらく被覆して居る景觀は、何とも云へない神秘的な深い印象を受けた。

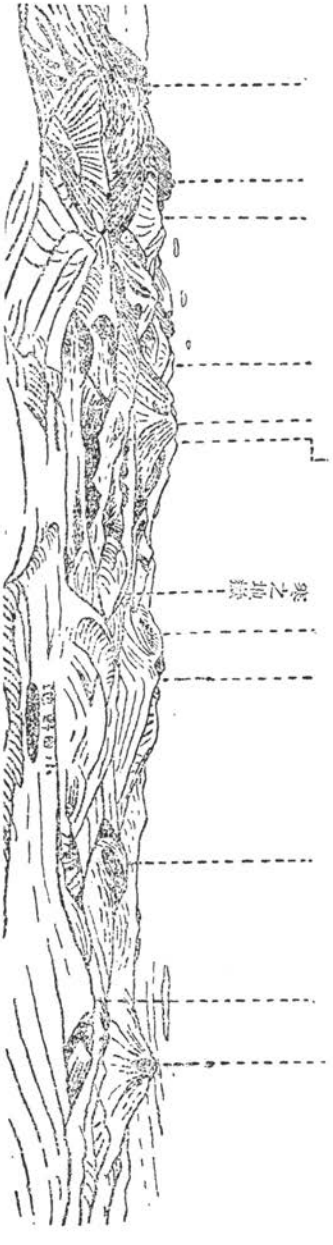
由布院での話によると、由布岳へは昔から土地の人は餘り登らなかつたものださうだ。登山路の如きも細い急な一筋路だつたのをやつと十一年の九月に村の青年會で理想的なものに作り直ほしたのだといふ。下の盆地の霧の未だ晴れ切らない頃に宿を出て、別府への道路を登り、約八〇〇米の小高原に出ると由布登山口の指導標と休息小屋とがある。こゝから左折してしばらく殆んど平坦な草原を行き、やがて小さな谷川に沿つた山路になつて、間もなく約一〇〇〇米の草原の鞍部に出る。これから急な斜面を小さくヂックザックして一氣に約四〇〇米を登り、その上は石段になつて東岳の頂上に導かれる。

由布岳の頂上は東と西との二尖峯に分れ、其間に舊火口があつて、今では火口の內側は全く灌木林に覆はれて居る。堆石の間には先日の雪が處々に白く殘つて居た。

東岳の頂上には小さな石祠があるが三角點はなかつた。地圖で見ると西岳の頂上にあるらしいが、其の方へは行つて見なかつた。

東岳の頂上からの展望は約二五〇度に亘り、東は眼近く鶴見岳を望み、更に大分の海波を展開し、

南は遙かに九重山群の全容を一眸に收むる事が出來る。涌蓋山の圓錐の右手には溫泉山の頂が雲に浮んで望まれた。




登山口から東岳の頂上迄約二時間半を要したが、下りは一時間未滿を要したにすぎなかつた。小さな山だけれどその遠望の由姿のスバラシク憧憬的な點と展望の雄大な點等、大變面白い山だと思つた。

時間がなくて鶴見岳へは遂に登らなかつたけれど、その方面から眼近く由布岳の英姿を望む氣分は爽敞だらうと思ふ。

別府への道すがら火男火女神社に寄り道したりして、大分時間を費やしたので、觀海寺溫泉についたのはトップリ日が暮れてからだつた。

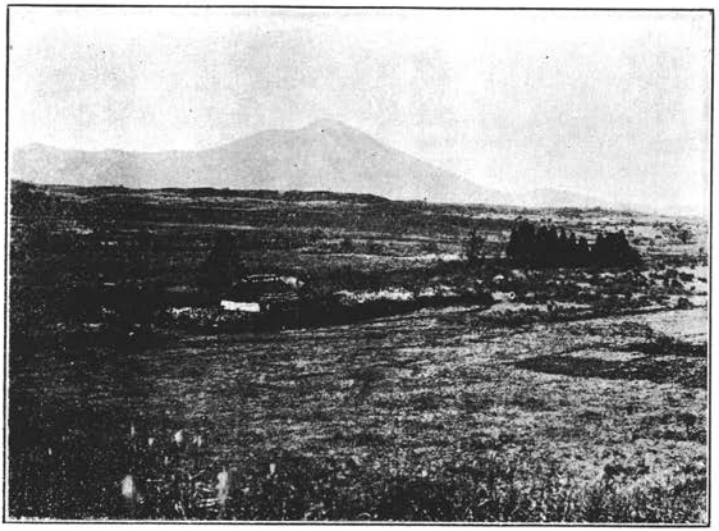
連日の山旅につかれた身體を湯に洗つて、まつやの三階のソファーに身をよせ、電燈の光り輝く別府の町を見下ろした氣持は未だに忘られない思ひ出の一つである。（一九二三年六月稿）

# 磐梯山

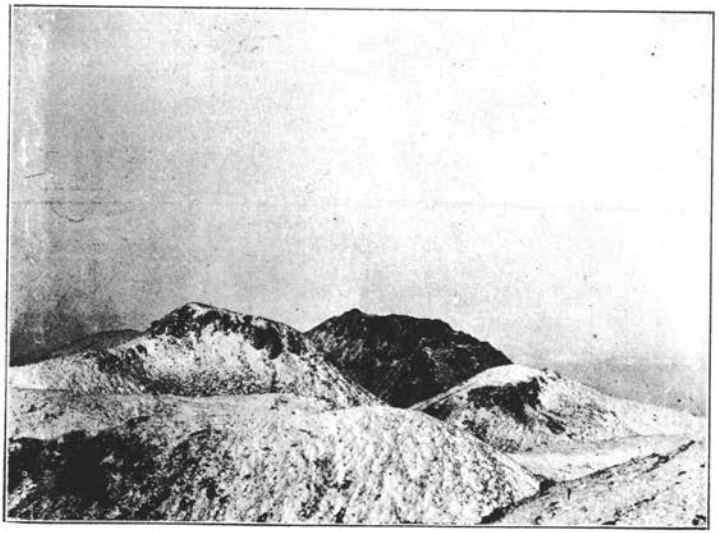
吉岡八二郎

## 猪苗代町より川上溫泉まで

十一月四日。横窓の硝子戸に映つた旭影に元氣を得て飛び起きて見ると、浮動する雲の隙間から落ち來る一綫の光を受けたのに過ぎない。此處から見える筈の磐梯山の半腹以上は霧の飛ぶと迅く、見る〳〵裾まで包むかとすれば、忽ち一方から赤埴山の半顏を拔く間もなく、中央から捲き戻して磐梯山の胸のあたり微かに顯はれたと見る內、袖を返したやうに復た赤埴山を滅却して一面の白濛々と成り終る。一定の方向を以て吹きつけて來る風が磐梯山體に衝突して、極めて不規則な渦狀運動を捲き起す結果、顯滅する雲霧の狀勢も千變萬化全く端睨すべからずであるが、複雜であつても實は一定の法則に從つて其變化を重ぬるもので、之を完全に數理學的に解き得るまで人智が進歩するだらうかと疑ひながら、朝食を濟して再び空を眺めると、斷雲頻りに亂れ裂けて、孔雀石を蒔いたやうに碧い處も見えて來た。今まで狂ひ廻つて居た霧の領分も蒸すより消ゆるが多く、頂上附近だけに亂鬪して居



九重山北麓の裾野及涌蓋山



久住山頂より東望（黑く見ゆるは大船山）

竹内亮氏撮影

る。やがて慣に霧れさうであるから、宿に案内者を頼んで見たが、どうも唯今からではと、頗る冷淡な態度に滯在は猶以て厭になり、午前九時頃江戸龜を立ち川上溫泉に向つた。

川上溫泉は猪苗代町から赤櫛塩ヶ峰西山の東麓を半周して約三里といふ。略ぼ並行した上下二條の道がある。下は長瀨川の右岸新田堀疏水路に沿ふて平坦であるが、上は見爾部落を過ぎて裾野の端を廻る野道で眺望が佳い。見爾の人家を出はづれて淺い松林の中を進むと、四五の村娘が落松葉を掻いて茸を捜して居る。隨分多いと見えて提げた籠を覗くと何れも半ば以上溜つて居た。松林を出ると道は茅野を縫ふて眼を遮るものもない。右手後に猪苗代湖を隔てゝ卓を据ゑたやうに山頂一文字の布引山が目につく。左方赤塩山の全斜面を蔽ふ枯萱に錯る灌木が紅葉して、蘿色に紅の飛白を置いたのが近くは粗く、漸々細かにやがて遙か高い處は一道の銅色に暈けて仕まふ。町から一里位の處で小澤を越す。沼平から溢れた水が赤塩櫛峰西山を劃つて流れ來るのである。此邊矮い柏が多く、硬ばつた廣葉を錆色に染めて山風に鳴るのは一種の淋し味を慮ずる。三ッ屋で上下兩道が合し、長坂の人家を左に望む頃から長瀨川に寄りつき、新田堀に沿ふて進むと裾野が盡きて山腹が急になる。道の兩側は一丈近い萱が生ひ茂り、其大束を負ふた駄馬に行き遭ふて馬子に用途を尋ねると、矢張り屋根葺用であるが、五十年以上も耐えると意張つて答へた。對岸ワイ太郎山との間は一面の廣い磧で巨石磊々、其中を一條の早瀨が流れて居る樣子から見ると、洪水の暴威を想像させられるが、近時は秋元湖の排水口に閘門を設け水量を調節するから、實際は洪水の患はないといふ。吾妻群峰南側の溪水は悉く檜原小野川秋元の三湖に集り、更に秋元湖から溢れて長瀨川を流れるのであるから、此の調節も出來るので、斯うなると河流も人間の爲め全然死命を制せられることとなる。

十一時頃川上溫泉に著いた。櫛ヶ峰の北麓、長瀨の右岸、萱の茂つた淺い谷の隈に四五の浴舍がある。何れも粗末な萱葺二階建で全然都人士向ではない。唯だ最奥の瀧ノ湯發谷だけが近年の新築で一

般浴室の趣味に適應するやう、俠骨磯谷氏が苦心設計に成つたものであるとか。川上溫泉は明治二十一年七月の大爆發に際し、泥流の下に埋沒したのを近年漸く再び開いたもので、四邊に何等樹林もなく、岩走る溪流もなく、泉溫も低く冬季は沸かして浴する程であるから、溫泉場として景勝の數ふべき何物もない。驛から三里の道は車馬を通じ得るといふだけで、其名も未だ廣く知られず、雪だ磐梯登山者の一部に利用せらるる外は、農暇の折近鄕民が來浴するだけで充分發展の域に至らない。

單に入浴を目的とすれば此處は寔に價値の乏しい溫泉場であるが、愛山家には至極趣味饒い處と思はれる。磐梯山頂まで爆裂口底を經て僅に一里半といひ、かつ此方面からの登山が此山を觀察研究しやうとする人には最も必要である。吾妻登山にも中吾妻から東西大巓や西吾妻には便利な準備地である。殊に瀧湯主人は此種人士に對し相當の理解を有する人である。瀧ノ湯は尾根の隈に在るから却て磐梯山をば望み得ないが、吾妻群峰は東吾妻から以西檜原峠方面まで欝葱たる針葉樹に掩はれた豐滿な山容を、其麓を涵す秋元湖の波光と共に欄前の一眸に收めることも出來る。磐梯裏と呼ばれる數里に亙る爆發後の荒蕪地が、殆ど無數に散在する大小の湖沼を圍んで疊堆せる岩塊の間に翠松が枝を翳すやうになつたのも二十年來のことであるとか。三大湖も皆一里内外の近い處に在るから、山影を亂して扁舟に掉すなり、河童を壓して拔手をきるも自由である。脚を吝まぬ人は春夏數日の悠遊に倦むことはあるまい。

## 瀧ノ湯から磐梯山に登る

十一月五日。秋も更けた。今朝は落ちついた空碧く晴れて名殘の白雲二三片悠々動くともなく漂ふて居る。冷やかな空氣が音もなく流れて誘はれた落葉がはら〳〵と散る寂びた朝である。旭を横樣に受けて黑樹姿に一層の重みを見せる西大巓の右に西吾妻が坐し、更に離れて踞る中吾妻も共に滿山蒼

黒何れも高さ伯仲したもので、裾を重ね合せた中津川の谷奥に東大嶺が平たい圓頭を低く沈めて見える。

午前八時案内の若者を伴ひ瀧ノ湯を立ち、玄關前から左に續く細徑を登る。大正三年に拓いた登路である。雜草の葉末に朝露滋く足袋先がすぐと沾れて仕舞ふ。此邊は爆發後一時は一穂の綠を殘さず埋められたのであつたが、今は楊の若樹が茂つて居る。垂柳の風情もなく秋紅葉の美もなく、路に布いた落葉も清からぬ沒趣味の樹であると思ふ。宿の筧に貢ぐ小流が右手に一二丈の岩壁を貼りつけたやうに滑り落ちて居る。瀧ノ湯の名の起りである。

瀧ノ湯から爆裂口底まで三十町といふ。爆發の際押し出した土砂岩屑で築かれて並行に走る幾條の低い尾根の間を登る内に楊は盡きて、二十年前後の黒松が全然土氣といふてない岩礫碎石の錯落せる間を點綴して明るい疎林が果てもなく廣い。曾て微綠をだに留めなかつた礫确不毛の荒野が當初十年間は纔に岩の凹みを苔が封じ、薬草鞋に短草が萠へ得たのみであつたのを、磯谷氏が黒松の種子を風に任せてふり蒔いた結果現今の有樣になつたものだといふ。其幹高に比べて枝繁く節立つて居るのを見ても、岩間に根を伸す生存の努力が現はれて居る。緩やかな勾配を松の間を縫ふて登り盡す頃、顧ると吾妻山の黛色と映發して秋元湖が白く顯れて來る。左に燕巖の岩崖が目立つて來る。爆裂口底は數十町歩の磧といふても、流轉後の圓礫でなく稜角の鋭い岩片を敷き詰めたのであるから、一歩を下す毎に蹠裏に突擊して來る。此磧を繞つて屏風を引き廻したやうに仄立する峭壁は、爆發の當時、大磐梯から櫛ケ峰の北側面を一氣に削り、小磐梯を全然抉り取り、約十九立方里の岩石を噴き飛ばして出來たもので、標高約一一〇〇米突の磧から沼ノ平北緣の岩角天狗巖まで直立四百米突を超へ、其基部の磧に接した附近から水蒸氣と瓦斯とを盛に噴騰し、轟々の響は微弱な硫臭と共に風に送られて來る。現今噴氣孔の大なるもの一個と小なるもの十餘個、微なるものに至つては無數である。是等噴氣

孔も今日では決して壯烈なものではない。白煙が渦まき騰る岩罅を廻つて萱雜草が平然と生ひ茂つて居る有樣である。地方人は是等を噴火口と言ひ慣れて居るが未見の人を誤る惧れがある。勿論淺間や阿蘇壽島の火口の如きものではない。之に較べると那須山の噴氣孔の方が幾分猛烈である。之に反し鉢壁は頗る壯大なものである。西端中ノ湯の北方から東端燕巖の北方まで一里十町に亘る馬蹄形を劃し、自然のハッパをかけて爆破した其儘を未だ風霜雨露の工も加へず、荊蘿の衣も着けず、懸崖と絶壁と錯綜し、岩稜と塊巖と磅礴するのみで、優麗の景趣を缺く代り豪宕の威を恣にして居る。其天邊から四時斷えず崩落する大小の岩塊が底部に堆積して可なり長い傾斜面を作つて居る中に、最上部が細粒の灰砂粉から最下部が犢大の巨岩まで恰も撰礦機にかけたよりも巧みに粒を篩ひ別けて、重力と摩擦との釣合に因る力學的堆積體面の大標本を示すものもある。東方櫛ヶ峯の兩側に當る岩崖は黝色堅緻な富士岩と砂礫層との各二三十尺宛數段の巨層を露出し、其岩層は縱横無盡、極めて不規則に壞裂し、怪奇な惡相を呈するばかりでなく、今にも割れて落ちさうなもの、既に崩落して狼藉たるものも多く、天候に依つては實際甚だ危險と思はれる。此最左端に在つて、犬牙を更に折り碎いたやうな岩頭歪んだ棚の如きものを燕巖と呼び、夏時岩燕が群棲するといふ。

爆裂口底の北邊は土堤狀の堆積物が大浪の如く隆きり、積からは所謂磐梯裏の荒原は全く望見することが出來ない。鉢壁の各所から湧出する少許の水は積の中央部から自づと東西に分流し、東に向ふものは鉢壁の麓に沿ふて燕巖の下を過ぎ、小溪流となつて川上方面に流れ、西するものは積の西北隅に潴溜して噴火沼を成へ、更に溢れて五色沼方面に流れ、沼から沼と傳ふて終には長瀨川に注ぐのである。（大日本地誌第二卷に載せてある磐梯火山圖には明細に澤の名が附記してあるが幾分誤りがあるやうに思ふ。）共に清澄に見へても實は強度の澁味を帶び到底口に入れ難い。鐵分を含むもの、流痕を鉢壁上から瞰ると蜿々赤繩を絢つたやうで一種の奇觀である。

積の西端大峭壁の直下に一軒の篠小屋がある。噴火湯と呼ひ、陋穢を免れないが數十人を宿泊せしむる設備があるとか。四邊全く岩石の外には一木一草もなく、近傍から湧く水は凡て飲むに堪へず、薪水までも一里下の川上方面から搬ぶのだとは不便も甚だしい。剩さへ崩落する岩石の危險は晝夜を分たず、一朝大崩壞でも起つた場合には家も人も一氣に生埋にせらるゝは明かであり、已に今までにも二三人の罹災者があつたといふ程である。曾て俄然山半を天外まで噴き飛ばし、瞬時に八千町歩の荒野を造り、五百の人命を奪つた大爆發を過ぐる僅に三十五年、山齢に比すれば數字にも表し難い時間である。今や煙も吐かず岩も動かぬとなれば直ちに此處に家を構へ、目のあたり地熱の存在を語る其湯に浸り、或は此岩崖を攀ぢて其山頂に立たうとするなど、人間も隨分圖々しいものである。

積に立つて此峭壁を瞻仰した處では、覗岩の陳列場の如く或は崩れかけた鋸の山の如く、近寄らば膚を裂き踏まば脚も折れさうに見えるが、丁度中央部噴火ノ湯の左方に岩塊を盛り上げた一條の急斜面、崩れた石垣跡に似た部分がある。此處を攀ぢ登る時は最も捷徑である上に面白味も多い。曾て淳宮殿下も此徑を御登攀になつたとのことで、體量二十何貫を有する時の郡長某も喘ぎつゝ扈從したとか。登り著いた處は沼ノ平の北緣上で猪苗代口登路の三合目に當り、磐梯主峰と櫛ケ峯との鞍部である。つて右方に天狗巖の名を有する巨巖が直下千尺に餘る崖頭に天風を喝して居る。舊火口の沼ノ平を直前に瞰下し其最低處は此處から百米突位も低く、鏡沼其他の小沼が萱や灌木に圍繞せられて居る。左方は峭壁の岸を傳ふて容易に櫛峰に登ることも出來るさうであるが、余は終に頂上までは到らなかつた。磐梯絶頂は額越しに尖峰を聳やかし、此處から更に三百米突も高く、沼ノ平に面した東側は全面峨々たる峭壁で、赤埴櫛ケ峯と共に三方から沼ノ平を衞つて居る。

天狗巖の傍から大峭壁を顎下にして數里に展開した磐梯裏の荒寥たる焦石原を瞰望する時は眞に壯烈、他の諸火山に見るを得ざる獨特の景色である。其成生の歴史が極めて新しいだけに自然力の偉大

さを感ずる印象も深いものがある。今茲に絮說するまでもなく明治二十一年の爆發は、熔岩は全然之を噴出しないで、舊時火口壁の一部であつた小磐梯の山體と共に磐梯全山の一部が欝積せる瓦斯水蒸氣のために撥ね飛ばされ、泥流と共に其岩石土砂を北麓長瀨川の谿谷に押し出したもので、二里餘の遠距離まで大なるは方數間の岩塊を搬んで居る。是等の一個を時間を構はず此距離に運ばうとしても現代の工學智識では或は不可能かも知れぬ。現今は一面に斑々たる小松原で、遠望には白味の掛つた淡紫紺地に綠色の大粒な小紋を染めたやうである。舊は此邊一帶今日吾妻群峯の兩側に見るやうな蓊欝たる森林に蔽はれ、猪熊の横行した處であつたのを、彈指の間に岩礫に埋め盡した其動力を精確に計算し得たなら蓋し驚倒すべきものであらう。夫がまた地殼中に欝積してゐた主として水蒸氣の張力に因るものとすると、汽罐の爆發に驚くなどは可笑しくなる。此絕大な自然の破壞作用を地文書などで抽象的に讀んだのとちがひ、活躍の舞臺跡を實地に視ると丁度燒跡を觀て一層大火の慘を偲ぶと同樣である。更に此荒野を親しく歩いて見ると、殆ど土氣を含まぬ岩屑の堆積した中から能くも松が生長したものかと思ふ。太さは目通直徑一尺に近く、白樺の可なり太いのもある。秋毎に散る松釵が朽ちたものを苔が綴ぢ茸の床を釀すものか、此頃では松の根方や刺の陰などに初茸モダシなども珍しくないといふ。雨淋風打も年淺く鋤鍬も藉らずして楚々たる松の姿態を育て上げる自然の回復力も亦た偉大なものである。

此凄愴たる荒野の景を緩和して少からず優艶を增すものは、何といふても三湖を始め一帶に散點する大小無數の小湖である。吾妻山の裾を分けて刻み込んだ三湖は、元來谿谷が堰塞され、溪流が潴溜して成つたもので、水色清透、數尋の湖底に沈んだ森林の殘骸を水面から透かし見るを得る程であるに反し、近時五色沼の新名を得た檜原湖岸に近い數多の小湖は、淡綠から濃碧、或は群靛、中には淡い紅殼色もありて、湖々獨特の水色を呈して居る。三湖の水は檜原湖(八一九米)から小野川湖(七九

四米）に流れ込み、更に秋元湖（七二五米）の水と共に長瀬川となつて猪苗代湖（五一四米）に流注する。此外の小湖は高いものから低いものへ凹處を傳ふて相通じ、譬へば芋蔓の絡み合ふたやうな水脈を作つて居て、面白いことは頭尾殆ど相接する兩湖が數尺の落差で流れ込んで居ながら、上のものは水色濃碧なのに對し、下のものは嫩草色であり、或は一衣帶水の逆で一條の岩帶に隔てられた一方の水は代赭色かとおもふと隣は濃綠色であることである。

氣の弱いものは膝節の震へる千尺の峭壁と一所に磐梯裏を一望するには、主峰の絕頂よりも天狗巖附近からが最も好適で、此處に立たば何人も必ず異樣の感想に打たるゝに相違ないと思はれる。

天狗巖の下で猪苗代道と合し、曾ては小磐梯に連つて居たらうと思はれる尾根の鞍部から絕頂を眉前に仰ぎながら、根曲り笹の蔓つた三十度に近い急斜面を登ること約四十分程で三角黠（一八一九米）に達する。左側は沼の平に切れ込んだ岩崖で一歩を過ると突差に那落まで轉落する。右は笹一面の山腹が曲線なだらかに遙か下の裾野まで展びて居る。

絕頂三角黠の傍に磐梯神社の小さな木祠が安置してある。此處に立つと北方磐梯裏の荒野は峭壁の上緣に限られて吾妻山の胸部と相對し、一切經山西方谷地平の高原から正東の安達太郎山の三峰を望み、白煙の立ち騰る沼尻火口跡が明かに見える。然し絕頂からの眺望は寧ろ南方の美觀が主なもので東北西は簇々たる峻峰が屏立するに反し、南望すると脚下に擴げられた磨上原には皺もなく、一刷毛に染められた霜枯色の中を綾手に野徑が行き交ふて見える。名高い三忠碑が一叢茂つた松の中に立つのも指點される。春萠の若草色の時も美しいだらうと思はれる。田疇廣く連つて參差たる籬落と浩漾たる猪苗代湖の水晶盤とは、何人の眸裏にも捺染せらるべき佳景である。

余等は午前八時に瀧ノ湯を發し、十時三十六分此絕頂に著いた。此時一團の霧が捲いて會津平野を覆ひ飯豐山方面も見えつ隱れつ、纔に若松市街を認め得たのみであつたが、晴れた時は此方面にも廣

闊な眺望を得る由である。後に中ノ湯で聞くと、飯豐山は元より羽後の朝日嶽も羽黑山も鼻の先に見えるとのことである。正午に近く頂上を辭し再び天狗巖に降つた。頂上から三四町下の處に弘法の清水といふ泉が湧いて居て何れの方面から登るも必ず天狗巖の傍を通るから、(尤も押立溫泉から直接頂上を目懸けて登れぬことはないが)夏日も渴に困む患はない。近時猪苗代町で建てた道標は到る處頗る懇切なもので、磧などには岩面に白ペンキで標的やうのものを畫いてあるから、單に登るだけには全然案内者などを要しない。天狗巖から西方に峭壁上を傳ふて中ノ湯まで約五十分を要する。歩々に氣を許せぬ惡路ではあるが四顧を妨げるものはない。今は笹と灌木のみが一面に綴ぢて居るが、所々に横倒れとなつて居る枯幹や根株は舊時の森林を物語るものであらう。

陸測五萬分一圖には上ノ湯、中ノ湯、下ノ湯の三浴場が記してあるが、今は中ノ湯だけである。夫も小さな二棟の篠小家で合せて五室もあるか。其一室は勝手の間で中央に爐を切り、片隅には冬籠用の薪が堆く積まれて、枯葉が室一面に散張つて居る。食料品は凡て大寺方面から背負ひ上げるのであるが、春は筍秋は茸だけでも生きて居れるといふ。春から夏にかけては百五十人の浴客が滯留して居るといふが、秋末から冬に向いては來浴者もなく、番人一人を留めて寢具なども運び去り、其番人も師走正月と六十日間は下山して二月初から降り積む雪の中を再び留守して居る。時に吹雪を冒して來浴する特志家もあるといふ。

余等は中ノ湯に著いて爐端に兩脚を投げ込み、名も知らぬ茸の味噌汁に溫りながら留守番の若者から、猫魔山で老猫を見た話など聞いて、一時間近くも憩ひ、噴氣孔の傍から再び爆裂口底の西北隅に降り、荒野の中央を横切り五色沼公園豫定地に至り其事務所に少憩した。中ノ湯から約一時間を要した。此附近約六百町歩の官地を檜區して一大公園を造る計劃は二三資産家の出資で、瀧ノ湯の磯谷氏などが苦心中である。中ノ湯下方の溪水を二百間近くも鐵管で導き、大噴氣孔の蒸氣を利用して之を

熱した上、更に一里ばかり公園まで引いて浴場を造らうとして居るが、餘程の研究を要する工事であると共に、幸に好成績を得ば公園の價値を增すこと少許であるまい。位置は風塵の到らない山間の淨境であつて、自然の儘に林泉の景致が備はり、矚目は甚だ廣闊、退嬰的幽寂に陷らず、讀書にも活動にも共に適する自然的條件は略ぼ揃つて居るが、今の處では何分にも交通不便の缺點がある。然し夫も林區署で吾妻山を伐採するため長瀨川に沿ひ軌道工事を既に起し、一二年內には竣工の豫定だといふから、さうなれば汽車を降りてから脚を勞せず此公園に遊覽することも出來る故、家族などを伴れた四五日の淸遊とか、或は都塵を避ける讀書などには趣味ある公園とならうから、余は切に其成功を祈る一人である。

夕暗にほの白く光る沼の邊りを過ぎる時、余等の近寄る物音に駭いて羽敲き激しく翔び立つた一連の鴨の姿が小野川湖の上空に消ゆるのを見送りながら、午後六時頃瀧ノ湯に歸着した。（大正十年）

# 雜錄

## ○藥師岳の新登路

藥師岳の登路について今迄に知られてゐるものは左の三であると思ふ。

一、太郎兵衞平より　二、五色ヶ原より

三、岩井谷より

藥師岳の東側は黑部川の奥廊下に當るから、この方面からの登山者は、大抵藥師澤を遡つて太郎兵衞平へ出た。吾々は藥師と赤牛とを聯絡して、太郎兵衞平と藥師澤との間に、もう一つ黑部上流の横斷線を見つけたいと思つてゐた。今夏（大正十一年）藥師のカールを下つて此目的を果すことが出來たので、次に其概要を記すことにした。

藥師岳の東面には四のカールが並んでゐる。吾吾が降りたのは其中で最も大きい即ち藥師の絶頂の直北にあるカールであつた。絶頂からはカールに遮られて、黑部川は勿論、下る可き雪溪の樣子が少しも分らなかつたが、カールの端まで下りて行くと、長大な雪溪が奥廊下の壁を突破して、眞直に黑部川にぶつかつてゐるのを知つた。カールの下には細長い雪溪が二つ續いてゐる、其中の左のものを下つた。それが右の雪溪と合してから暫く行くと雪が途切れて、左方岩井谷の頭から東に延びた枝尾根の南側から來り合する雪溪の下へ、二丈許の瀧となつて奔落してゐる。次で右から雪溪が加はると谷幅が著しく廣くなつて、三十間許もあつたやうに思ふ。ここから黑部川との合流點までに大きなクレバスが三あつたが、孰も一部分連續してゐたので、難なく通過することが出來た。最後のクレバスで、岩井谷の頭の直下にあるカールに發源する谷が合する。夫から三四丁下れば黑部川へ出られる。吾々は頂上から約三時間を要した。

始の計畫では、奥廊下を遡つて赤牛岳の頂上直下から出る谷を登る積りであつたが、徒涉や壁へつりが存外時間を要するので、最初に入つて來る

谷を登つた。（こんな所へも曾て盜伐に來たものがあるのか、古い切株を一箇見つけた。）その夜はこの谷で野營し、翌日ヤブをくゞつて一つ南の谷へ越し、尾根に取り付いて午後三時半赤牛岳の頂上に達した。赤牛の西側面の谷は、どれも非常にいいが（但落口は悪いらしい）、黑部川へ出てからひきどる故、この谷を上下するのが最も得策であらう。黑部川から赤牛の頂上まで約九時間は懸ると見なければならぬ。藥師岳とは無關係であるが、序に今夏通過した御前澤のことを少し書いて見たい。

御前澤の水源は、其雪量日本アルプス中第一と云はれてゐる雄山のカールである。黑部本流との合流點は、御山澤の落合から行程一時間半許の處にある。落口から十町餘りは最も險悪で、高い切り立つたやうな岩壁が兩岸から逼つてゐる。へつるのが非常に危險だから、水量が多くては無論通れないであらう。又流が急で殆ど瀧の連續である。其中可なり大きいのが三つ許あつた。落口から四五町で第一の瀧を見る、三段に分れてゐる、各段とも長さ一丈位であらう。第二の瀧も亦三段に分れ、第一のものよりも大きい。第三の瀧は最も大きくして二段に分れ、上段三丈下段一丈程であらう。岩壁と瀧とから逃れ出ると急にひろ〳〵として雪溪が顯れる。一支流が合してから尙ほ五六丁も行くと谷が大きな段をなし、雪が切れて三丈位の瀧をかけてゐる。こゝは左側を搦んで瀧のすぐ下に出て對岸に渡つた。そして又雪溪の上を歩く。兩側の尾根は著しく低い。暫くして谷の傾斜が增し、富士ノ折立のカールへの谷が右に岐れる。雪溪を登り盡すと半月狀の堆石地へ出る。更に登つて猿股の上端に達し、終に五の越へ登り着いた。雄山のカールに就ては、曾て辻村太郎氏が湖水のことを書れたが、殘念ながら見出す事が出來なかつた。吾々はこの日御前澤の落口から出發して、雄山の頂上まで六時間餘を費した。落口から別山平又は室堂までは一日で樂に行ける。

（今西錦司）

## ○丘陵　山岳及アルプスの範圍

「山」の内には丘陵もあれば山岳もあり、アルプスもある。此等の間には確乎たる定義も範圍もないやうである。其處で私は此處に此等の私的範圍を定めて見やうと思ふから、多數が賛成なら今後其れに從つてもよい。

丘陵も土地の高まつた山には相違ないが、山岳やアルプスとは自ら段がある樣である。此等の區別を雲高と結び付けて考へたいと思ふ。層雲即ち低く空際に横はる灰色の不定形の層狀雲で、雨を降らすことなく、一種の高霧と稱す可き平均高六百米（千九百尺）の高さの雲のある附近に頭を出し、其れ以上に頭を出しても積雲の下底や、亂雲の高さ即ち千五百米（四千九百尺）には達しないものを丘陵の部類に入れ、其れ以上即ち亂雲や積雲の下底を突破するものを山岳と云ひ、山岳の内でも盛夏殘雪をのせてゐるものをば、特にアルプスと呼びたい。アルプスの語源から云ふと雪嶺の意味だそうだから、萬年雪の衣を着て居る程度のものを山岳中でも特にアルプスと言ひたい。然し寒帶地方としては低い處からでも雪があるから左樣な定義も可笑しいが、溫帶や熱帶地方として、盛夏雪を戴くものをとの意味である。近時「アルプス」なる語の亂用も甚しく、前記丘陵の範圍ならまだしも、裏の築山みたいな高地にも何々アルプスと新聞などに散見するに至つては、吾人はアルプスの爲に泣き度なる。又前記丘陵の範圍の高地に遠足しても山岳旅行家と銘を打たれてはこれも變に聞える。單に登山と言つてくれればよいものを山岳云々とされては變である。積雲の下底以下の山に山岳の名稱を附したくない。同じ山岳でもアルプスは又前述の範圍に限つて唱へて貰ひたい。即ち山を丘陵と山岳との二つとなし、山岳中盛夏白衣を纏ふものを特にアルプスと呼ひ、アルプスや山岳なる語の亂用せぬ樣にされたいものである。又日本アルプスの事を特に外國語の厄介にならなくても「雪嶺」位に改名してもよいと云ふ人もあるが、アルプスと云ふのが世界的になつてゐる以上、無理に在來の國語にせんでも、アルプ

スと呼んだからとて、非國粹保存にもならず、西洋心酔にならず、アルプスの方が却つて響がよい樣に思ふ。（山本德三郎）

## ○白馬岳遭難記

大正九年八月十九日午後六時四十分大町發、四ツ家行の自動車で白馬館に投宿。二階の裏手白馬連山に面した一室に希望の夢を結んだ。

明くる二十日早朝、天候面白くは無かつたが、宿の主人が夕方は晴れるとのことに、投宿の人々と共に支度を終へ、午前七時十分に出發した。

自分は今迄山登りに出掛ける時は、何時も一人である。これは別に一人でなければならぬと言ふ理由も無いが、丁度行を共にす可き人が無かつた爲め、先づ止むを得ず一人で出掛けたのが重なり重なつて、今では同行者を得度いと言ふ考は少しも無く、不安と言ふ樣なことは聊かも感じない。寧ろ人に對しても自然に對しても、自分の氣分の向ふが儘の行動を採り得られるのがうれしいものになつて來た。素より一人で出立はしても、途中で目的や日程を等うせる仲間に出會ひ、意氣投合して同行を願ふことは度々あることである。これは日程其他が大體一致した場合であるから、自分の氣分に無理を感ずることが少い。昨年は木曾御嶽から乘鞍に向ふ途次、松本驛頭で京都の下村氏一行に會し、白骨、乘鞍越平湯、高山と三日同行を願つた。一昨年は常念、槍方面行に、直江津驛より金澤二中山岳會の二氏と同行を願つた。自分の經驗では一人の旅も途中で澤山の同行者を得て、見聞を豊かならしめ、而も行動を共にすべき義務がないから至つて自由な氣分を持する事が出來ると思ふ。

白馬行も其例に漏れず一人旅ではあつたが、前日松本に向ふ汽車中で東京本郷の醫師一行と知り合ひ、以來行を共にして同室に宿泊し、今朝も共に出發した。醫師なる人は體格長大にして、相當肥滿し、年齢三十五六、今一人は藥種商にて體格大ならず、肥滿せぬ方で、年齢は四十五六歳ならんか、案内者を伴うて居る。自分は醫師なる人の體格の登山に適せざるを思ひ、道の捗々しからぬ

を憂ひたものの、さりとて別るるも心苦しき樣感ぜられ、共に緩歩を運び、朝香宮殿下御徒渉姿の新聞寫眞版に出て居た南俣澤との合流點二俣の假橋を渡り（本橋は流失せしものか當時架替の工事中であつたと記憶する）、十時十分猿倉の茶店に着いた。

今朝自分等よりも先に出たり、又あとから出て自分等を追ひ越した二三の組は、皆茲に休んで居た。猿倉に着く迄の天候は曇つては居たが、ひどい雨も來らず、頂上方面は濃い霧の中にたまに一部の姿を露はすこともあつた。茶店に居る主人側の人々の話では、登山は可成困難とのことにて一同當惑の眉を顰めて居た。其内に白馬尻方面から息喘がせつゝ續々引返し來る先發登山者が、雪溪以上は大荒にて、頂上着は思ひもよらずと言ふに、愈自分等も本夜は茲に一泊と定め、ゆつくり茶を啜る折しも、下りて來た一人の頑丈なる案内者は、登山は大丈夫であると言ふに、一同は俄にどよめき立つた。此案内者は所用ありて危險を冒し、頂上小屋から下山したが、丁度其頃から模樣がよくなりつつあつたから、午後の登山は安全ならんとのことだつた。自分等も勘定濟ませ、元氣づいて十一時十五分猿倉の茶店を出立した。醫師なる人は昨年の富士登山は非常に勞れもしたが本年は馴れた故か平氣だと言つて居たけれども、道は更に捗らない。其うち毛布、寢具其他炊事具等を山の樣に脊負ひて下る數人に會つた。聞けば縣營室堂は昨日限閉鎖したとの事である。

白馬尻出發が午後一時。この時分はまだ雪溪の大部分は上の方に擴つて居るのが仰がれたが、登るに從つて霧足早く且濃度を增してくる。氷河のあとを殘したと言ふ結板岩も、附近雪溪の右手にある筈であるが、此霧中では探る氣も起らない。

何時の間にか醫師一行は遙か後になつてゐる。其中に雪溪の分れ目に來たが、其時は已に咫尺を辨ぜず、そこで立ち止つて後方案内者同伴の組の來るのを待つたが、中々來ない。漸くにして遙か横手の方に人の聲らしく聞えたので、急ぎ一行に加つた。こんな時には案内者の側を離れる事は危險千萬である。

一時四十五分雪溪を終りたる頃より風雨漸く加はり、登山の困難も亦一通りではない、途中御花畠の急坂を登る頃、雨を冒して我等を過ぎ行く一行があつた。後に聞けば山麓の青年團員にて、本日縣營室堂引上げのあとに陣して、自炊生活を樂まん爲の登山であつた。故に各自木炭、米、味噌其他宿營に必要なる一通りを携へて居た譯である、自分は比較的足の早い一行と共に、大分登つたが、縣營室堂下方、大なる岩の邊に達したる頃は、下方よりの烈風の爲に笠、莫蓙等は木葉の如く飛ばされ、後頭部に吹きつくる砂礫の爲、岩蔭に風を避けつゝ用意の厚毛製鳥打帽を冠り、其上より手拭にて二重に後頭部より耳頰を覆ひ、下方より逆上する雨を防がん爲、桐油紙を二重三重に腰部に卷き、紐もて一寸置き程にぐるぐる卷に縛り、只杖を便りに縣營室堂に辿り着いた。

この間腰部に卷いた桐油紙の紐から出た端々は殆ど切々に吹きちぎられ、手拭の上から打つた小石の爲痛みはげしく、殆ど無感覺の狀態となつた。幸に先に我等を過りし青年團員の已に火を起し、濡らしたるものを乾かして居た故、自分も其恩澤に浴する事が出來た。其内に二三の組が命からがらの體にて、殆ど死人の如き顏して這入て來た。いづれも火のあるのに一命を助つた樣なものだつた。途中の登山者は已に皆此室堂に避難する事が出來たのだらうか。否まだ着き得ない一行がある。それは先の醫師一行である。途中追ひ越した人々の話によれば、醫師は雪溪の上より已に非常に勞れ居り、案内者も困憊の狀態であつたから、今頃は如何して居るだらうとのことであつた。一同不安に滿たされつゝも、各自分の命の助かりしを神に謝するが如くであつた。大分時間が經つて後に室堂の戸を開けたのは醫師の案内者であつた。少しおくれて醫師なる人は、全く此世の人とも思はれぬ姿をして這入つて來た。皆勞りつゝ避難し得たのを喜んだ。嘸勞れた事であらう。全く今日の登山は大に無理であつた。

室堂の戸を締切つてあるのに、外の風の音で話も充分にわからぬ位。そして其風の音に過期がある。自分は嘗て玄海灘で荒浪に遭遇した時、船員

の目を逃れて、上甲板から船首の梯子を登り、最先端の柱に力一杯抱きつきて、山の樣な波濤の高く低く舳に向つて突進咆哮するさまに、飽かず視入つた事がある、船が波の山に乘り上げ、谷底に逆落す度毎に、舷側に碎くる波の咆哮に、何とも言へぬ凄さの高低があつた。今丁度其れを思ひ浮べて居る。然し自分には何とも言へぬ痛快な感がしてならぬ。

此數組の中に千葉縣の甚だ勇敢な四五名の一行があつて、案内者を連れて、頂上の室堂に出發せんとした。今日からは此室堂では食物なく、夜具なく、自身携帶品の外何の設備もなき故に、頂上の室堂迄强行する必要がある。自分もこの一行と共に出掛けた。あとの數組は出かける樣な氣力があり相には見えなかつた。風は少しも其の勢を緩めないが、回復した元氣で道は運ぶ。まるで下から吹き上げられる樣なものた。自分は案内者のすぐあとに從つて、尾根近く進んだ頃、風力俄に增し、ともすれば足を拂はれ相なので、二人共杖を上方に右足を踏張り、辛じて體を支へたが、案内者は急に地に伏しつゝ四五間後戻りして、其時已に平蜘蛛の樣に伏して、岩に獅嚙みついてゐた一行の側に至り、一人の耳に接して居たが、忽ち懸命に下方に向つたのが、霧の飛び來る合間に見られたので、此時迄危難と言ふ事に就ては何の考も起らなかつた自分をして、急に不安の念を懷かしめ、力一杯四五間を戻り、案内者の接した人に事の如何を尋ねた處、此儘ではとても危險故直に下の室堂に引返せとの事であつた。此人は一行中最も元氣あり、顏面の表情もて、自分と語るを得たるも、他の人は皆大分後れた位置で生死の境に彷徨ふて居た事であらう。呼吸は殆ど困難を極め、岩石より手を放てば、身は大地と離れんず形勢である。風は秒々に强くなり增る許り。自分は下山の報を腦裏に知覺するや否や、勇を鼓して谷底目がけて脫兎の如く落ち行かんとしたが、先に下りに向つた案内者もすぐ前方にあつて風に飜弄され上方に戻されつゝ奮鬪して居る。自分は殆ど眞逆樣の姿勢を執りて地上に伏し、岩や這松に取付きあらん限りの力で下にからだを引寄せ引寄せ

辛くも案内者と前後して室堂に着いた。

頭は震へて、口は全く利けず。火の側に冷き身を運び、漸くにして常態に復するを得た。心臟の鼓動は早鐘の如く、試に脈搏を計つて見たら、百二十に達して居たと記憶する。

一行も間もなく進々に歸つて來たが、慘狀はお話にならぬ位である。案内者のいふには、此暴風雨では正道はとても登れない、山の腹を傳つて、上方室堂の直ぐ下に出で、其れから風に吹き上げられて室堂に至るより外に方法はないとのこと。茲に於て千葉一行の元氣の面々これに同意し、再び出發の用意に取掛つたが、一行中の比較的年長者、如何にしても肯んぜず、此室堂より再び出づれば死を覺悟せざるべからず、一夜位絕食し防寒の具不足するとも、まさか死する事もあるまじと言ふと、一行の人々無理に同意せしめ、遂に再度の出發を決行した。處が山の腹を斜に二町も進んだと思ふ頃、この年長者が果して苦痛を訴ふるに至り、止むを得ず、再び引き返す事になつた。

室堂に着いた時は最初と同じく、復た口は利けず全身は寒さに殆ど常態を失して居たので、同復にまた二三十分を要した。これで此一行も最早出發は斷念した。進々暮色迫り來り、風雨も益募る有樣なので、壯年氣鋭の案内者二名、死を決して頂上小屋に向ふと言ひ出したのを、一同切に止めたが、この疲勞の上に食物等が無くてはと、支度に取かゝる。自分は二回迄は何の不安も無く出發したが、此度は可成疲勞を覺え、途中萬一の危險を慮つたが、此室堂に泊る今夜の光景を思ひ、意を決して同行する事に定めた。皆口々に制止の聲を放つたが、いざ出發となると、食物の取寄方を依頼するものがあつた。案内者は今出發しても已に暮色迫り、且必死の行であるから到底歸ることは不可能である、若し明朝になつても暴風雨が止まなければ、如何にかして食料を運ばうと答へ、三人は一團となつて一歩一歩と踏み締め踏み締め杖と兩足に滿身の力を籠めて進む。風力口を壓して一語を發する能はず。目は只先人の足元を注視するのみ。斯くして力の有らん限り、精力の續かん限りを盡したが、濃霧と暮色との爲に足場の見當

を誤つたか、一歩を踏み外すや忽ち身は二三間の上方に吹き飛ばされ、這松の根に漸く體を止めた。口は開くことを得ず、聲は出ても雷鳴中の囁きに似て、何の用をもしない。死に面した心持を本當に此時に體驗する事が出來た。そして萬一助つたならば、以後山登りを止め樣とは此時初めて思つた事である。夫れは自分の山登りに就て反對者がある。殊に自分の結婚以來、結婚に干與された人人から特に止められたが、自分にとりて唯一の樂であり、慰安である山登りを止めてはと、今迄續行して來た譯であつたから。然し此考は翌日は既に雲散霧消してしまつた。

自分の玉の緒はまだ盡き無かつたものか、時を移さず案内者二人は自分のすぐ風上（下方）に來て自分を見付け、三人肩から首を互に抱き合つて這松の間に伏した。意識は變らないが、口は全く利けぬ。暫く休息の後、三人は同じ姿勢で進み、やがて上方に吹き上げられた處、間もなく其處に頂上の室堂があつた。

自分は室堂のすぐ下方で吹き飛ばされたが、其位置をよく知つて居れば、假令案内者を見失ふとも不安を感ずる事はない筈である。自分の登行の地圖は可成詳細に調べて置く必要のあるのは、斯る場合に遭遇する事もあるからである。

自分は力を出して無理に戸を開けた。同時に室内では灰神樂があがる、ランプは飛ぶと云ふ大騒ぎを演じたが、人々は自分の姿を見、事情を聞いて其無謀の企に驚き、且つ賞讃の辭で迎へて呉れた。時に午後七時頃であつたらう。

これで再び人心地が付いて晝の登山者に復活した譯である。からだは震へ、聲も滿足には出ないのを强ひて何氣なき體を裝ふに努めたが、血行の平調に復するに連れて其必要はなくなつた。

暴風雨は夕方より時の經過と共に益烈敷なつた。早く室堂に着いた一行の中にも負傷者が大分ある樣子で、自分の話を熱心に聞かれた或人の如きは、向脛に大きな裂傷を受け、手當の方法も無く血に塗れて居た故、自分は脱脂綿、繃帶等にて手當を施した。誰も皆室堂が風の爲に翌朝迄無事でゐるか如何かを心配した。戸は絶對に開かず、

尾籠な話なれども、空罐にて用をたした。隙間を通す風と共にランプの明滅につれて人々の不安の面は濃く淡く描き出され、斯くして暴風雨の夜は更けて行つた。

夕食は火の焚けぬ爲に容易に調はず、午後九時頃風勢が稍弱つたので漸く飯が運ばれた。十餘の人は夜食を濟すや否や直に就褥した。自分は十時頃迄濡れたものを乾かし、十時二十分に寢に就いた。

案内者の話に依ると、此山開けて以來これ程の暴れはまだ嘗てないとの事である。

二十一日。暴風雨の爲眠られず。四時起床、新聞紙を焚きて火を起し、暖を取りつゝ天候を氣遣つて居たが、次第に風雨も收つたから、六時十七分毛布に包つて頂上を極めた。濃霧の晴間晴間に富士、新潟、富山及び槍、穂高の方面を除く日本北アルプスは殆ど全部見渡された。（本誌第六年第三號の卷頭を飾る高野鷹藏氏撮影「白馬岳の展望」と題する印畫は、西及南の方面に限られてはゐるが、鮮明に白馬岳の展望を語つて居る。）

六時五十二分頂上を辭して小屋に歸り、朝食を濟して杖に燒印を捺しなどした。昨夜に引かへた天候に、下の小屋へ泊つた連中も大に喜んで登つて來た。風はまだ可成強い。戸を細目に開け、カメラを室内に据えて風を防ぎ、自分は杖に全身の動搖を支へて、立山連峰の雄大なる眺めを背景に、遭難記念の撮影をした。

杓子も鑓も思ひ止つて、九時十七分下山の途に就き、九時五十五分大雪渓に入り、十時十四分白馬尻、十時五十五分猿倉休憩所着。十一時二十分猿倉發、一時三十四分四ッ家着。食後自動車を待ち、（下山者多き時は一足でも早く宿に着き、乘車の先約をすれば急ぎの時は都合がよい。）乘合の人々と三湖の景勝の優劣などを語りつゝ、五時四十五分大町着、日程の都合上七時に大町を出發して松本に向つた。（田中晴眞）

## ○沼尻及野反に就て

本誌十六年三號雜錄欄の「上州の古圖と山名」と題する項中に於て、上野國志に「此山の内に沼

あり沼尻と云」とあるを評し、「池の名を沼尻といふとあるのも少し變だ、普通は沼から水の流れ出るあたりを沼尻といふので、沼其物を沼尻と稱する例を聞かない」と書いたのは、少しく穿鑿不行屆の嫌があつた。現に信越線の柏原驛の北方に野尻湖といふのがある。野尻は即ち沼尻で、ヌジリからノジリとなり、終に野尻と充字されたものであらう。尤もこれとても沼から水が流れ出るあたり即ち沼の尻に村落などが開け、それが沼尻と呼ばれたのがもとで、野尻湖なる名稱が生れたものであらうから、精確にいへば矢張本よりの湖名ではない。年代不明ではあるが、古い地圖や記錄に辨財天の池とあることなども、これを證明するものと稱してよい。

又同じ項中に、「そりは鞍部を指していふ言葉であるが、同時に峠道として人の通行することを條件としてゐるらしい。其所が平であれば野反などの地名が生れる」と書いたのは、野の字に拘泥し過ぎた說であつた。この野は沼即ちヌから來たものであるから、沼のある反り即ちヌゾリがノゾリとなつたので、其處が平であると否とには關係ないものであつた。從つて富士見十三州輿地全圖に記入してある沼尻をノジリと讀むにしても、それがノゾリの轉訛でないことは明かで、兩者は全く別語である。そして野反といふ名は天保以前から用ゐられてゐたことは確であるが、何故か富士見十三州圖には採錄してない。（木暮）

## ○高山蘚類雜記（二）

たかね＝しもふりごけ（眞蘚類……ざばうしごけ科）一名　みやま＝すなごけ。

本種の分布區域は甚だ廣く、恐らく全世界の高山地帶で殆ど產ぜざるなき有樣である。本邦に於ても北海道から本土九州は勿論の事、朝鮮臺灣に至る高山地帶に極めて普通である。樺太には未だ產否が明かでないが多分產する事と信ずる。殊に面白いのは伊豆の大島と大隅の屋久島に產することである。大島產には二樣あつて、一は普通種に異る處がないが、一熔岩片上に着生するものは、其形態が甚だ小さく、普通種の約十分の一大であ

る由である。（植物學雜誌第二十六卷二百七十頁所載の岡村周博士稿を參照せられたい）。

特徴としては、一見恰も霜を被つて居る樣で、和名の起因もこの點に生じたのである。それは葉の先端が透明な爲め外觀が白く見える。又莖柄に乳頭を有する事も他種と區別する一要點であるが、但し本種は子囊を着生する事稀であるから、前者に依る區別で、類似種と混同視する事は減多にない。

みやま＝すぎごけ（眞蘚類…すぎごけ科）

本種の分布も日本としても亦海外としても可なり廣まつてゐる。高さ一一「セ、メ、」、暗綠色で分枝せず、葉は線狀披針形、基脚部は擴がりて鞘狀をなす、先端部の邊緣は小鋸齒を有し、乾燥しても多くは縮れない、莖は圓筒形で長嘴ある蓋を有する。

たかね＝すぎごけ（同上）

本種は本邦の特産で、本土中部以北の高山には大概は產する。中部以南や朝鮮及び樺太には未だ明かで無い。高さ二〇—二七「ミ、メ、」で、下部の葉は廣く鱗片狀をなし、中部のものは披針形で基部は卵形を呈する。葉緣に鋸齒なく且つ內施する、莖は略卵圓形で、緣齒は短く長短不同である。

研究上の注意

獨り蘚類植物のみではなく、總て自然物の研究は、最初から組織的に調査を開始すると云ふのは其の效果が薄い樣に思はれる、殊に本類植物の如く本邦に成書の乏しいものは一層の困難である。從つて興味も少く、どうかすると直ぐに嫌氣が出て手に取るのも面倒な位になる。で初めての人は矢張り兎も角く目茶苦茶に多種多量を採集し、各同一番號を附せる其の各半量を自分の信ずる先輩に送つて、それ〳〵査定を乞ひ、標品の增加に勉める。其の間に追々と珍らしいもの新らしいものが標品函を彩る內に自然と趣味も覺えて來るのでそれから廓大鏡から顯微鏡に進み、他種と比較し始めると云ふ順序で進むのを得策と思ふ。採集も度重なり標品も增加せば、同趣味者と標品交換を開始し、進んでは歐米出版の參考書を購求して對比調査に從事すると云ふ方法をお勸めしたい。

本邦で權威ある參考書としては、

安田篤著　植物學各論　隱花部中の蘚苔部

を御勸めしたい、歐米出版のものとしては、

Lorch, W.—Die Laubmoose (G. Lindau, Kryptogamenflora für Anfänger. Bd.V. 1913).

——Die Torf-und Lebermoose(——Bd.VI. 1914).

Grout, A. J.—Mosses with Hand-lens and Microscope.

Dixon and Jameson—The student's handbook of Britsh Mosses. 2.ed. 1904.

Lesquereux and James.—Manual of the Mosses of North America. 1844.

等は適當であらう、尙ほ進んだものとしては、

North American Flora, vol.XV. 1913.

Bridel.—Bryologia universa. 2vol. 1826—1827.

Bruch, Schimper et Gumbel.—Bryologia Europaea. 6 vol.

Hedwig.—Species Muscorum. 8vol. 1801—1842.

Jaeger et Sauerbeck.—Gener et Index Muscorum system. 1873—1879.

Sullivant.—Icones Muscorum. 1864.

Limpricht, K. G.—Die Laubmoose Deutschll., Oslers. u. Schweiz. (Rabenhorsts Kryptogamen-Flora. vol. I—III. 1890—1904).

Brotherus,V. F.—Die Musci (Engler u. Prantl, Die natürlichen Pflanzenfamilien). 1909.

Warnstoof, C.—Sphagnales—Sphagnaceae (Engler, Das Pflanzenreich, 1911).

等であらう、專門雜誌としては、

Revue Bryologiqeu.（隔月發行）

The Bryologist.（同上）

がある、前者は佛國の T. Husnot 氏主宰で目下第四十八卷の刊行中、後者は米國の Sullivant Moss Society の機關雜誌で第二十四卷の刊行中である。

以上の外にも勿論多數あるが、煩を厭ひて擧げぬ事にした、本邦產に就てのものは、最近のものを除き、松村博士の帝國植物名鑑隱花部に出て居る。

尙ほ詳細に知りたい方は直接小生に宛て御通知次第報導することに致します。（笹岡久彥）

# 雜報

## ○關東地方大地震

去る九月一日の正午近く起りたる關東地方の大地震は、震動範圍頗る廣く、殆ど本州及四國の全土に亘り、就中烈震區域は伊豆半島の東北部より房總半島の東南に至る相模灣及東京灣の沿岸地方にして、東京横濱の二大市を始め、北條、館山、横須賀、鎌倉大磯、平塚、國府津、小田原、箱根等の如き損害甚しく、殊に東京横濱の二市は震後に發生したる火災の爲に全市大半は焦土と化し、死者數萬人を出すの慘狀を呈したり。

### 大震の觀測

二十六日氣象臺發表

房總半島及び湘南地方を中心とせる土地の隆起は、遠く銚子附近に及び、房總半島南端布良附近に於ては九尺前後に及べり。又大磯附近にても八尺位の隆起を見、それより西するに從つて隆起減少して、熱海附近に於ては氣附かざる程となる。更に南方稻取附近は反つて土地の低下せる模樣にして、伊豆大島も少しく低下せるが如し。即ち土地隆起の極點は房總半島の南端附近より大磯附近に至る一帶にして、最大八九尺位なるべく、若し斷層等あらば相模灣内にあるべく、陸上にその跟跡を求めんとすれば、小田原熱海の中間にあるべく、根府川伊東の被害は或はこれに歸因するものにあらざるか。

### 大震の餘震

微動計及び强震計觀測より見るに、震源距離も方向も區々にして房總半島南部より相模洋一帶横濱附近に分布せるが如く、就中二日午前十一時四十七分頃に起りたるものは、九十九里濱附近にその震源を有し。勝浦にては近日の本震より反つて强かりしと云ふ。而して九十九里沿岸及び勝浦附近に小津波を起せり。今回の地震に因る被害の甚大なるは房總半島南部、三浦半島相模沿岸及び熱海附近に亙る地域にして、横濱東京の被害は主として家屋の構造と火災とに歸すべきものならむ。

### 房總半島

房總半島の被害は館山北條を中心とし、那古船形を經て北上するに從ひ、次第に輕微となり、木更津附近に至りては著しき被害は僅少となり、千葉市に於ては家根瓦の被害位に止まる。北條より千倉及び南三原に至る山間の地域は震動特に著しく、稻都村附近は道路の破損最も甚し。此山間の地域を界として、半島南部の北は地質的關係によるものか被害は至つて少し。安房郡一帶海岸の道路は多く斷崖の下部を通ずるが故に到る處山崩多く。通行尙ほ困難なる處多し。洲ノ崎野島崎兩燈臺は破損特に後者は全く破壞せられて舊態を止めず。布良測候所も亦大破使用に堪えざるに至れり。所謂外房州の一帶は千倉南三原附近に於ては被害輕微にして記するに足らず、半島一帶土地隆起せるため、湊、西岬、富崎其他の漁港は船の出入に困難となり、全く港の價値を失ふに至れる

ものすら見受けたり。既記の如く半島南部の一部は地震の被害至つて輕微なりしに關らず、津波の來襲によりて家屋の流失船舶の破損等を見るに至りたり。津波の高さは洲の崎にて約二十尺、富崎村にて約十二尺位なり。勝浦以北にては一日の津波は著しからざりしが如くなれども、二日の餘震によりて小津波あり高さ約六尺位にて被害を見るに至らざりしは幸なり。

銚子及布良

銚子に於ける微動計は地震の初めに當り西微南に動き、布良に於ては北々西に動きたり。尙二日午前十一時四十七分のものは、銚子に於て北々東に動きたり。これらの結果と水戸（略北東に動く）東京（同上）の觀測を以て一日午前十一時五十八分の本震の震原位置を求むれば三浦半島附近にあるものゝ如く、二日午前十一時四十七分のものは勝浦附近の海上にあるものの如し。初動方向は地質的影響多大なれば、更に多數の觀測を以てするにあらざれば震原の位置を決定すること困難なり。（本報告中鹽海小田原方面の調査は海洋氣象臺技師須田完次氏による）（九月二十八日東京朝日新聞）

## 相模灣底陷沒

海洋調査の天鳴丸歸る

水産講習所では海洋調査船天鳴丸を發航せしめて、十九日から二十九日まで相模灣一帶の水深調査を行つたが、一行は三十日一先づ引あげて歸所した。その結果について丸川技師は語る。「今回の調査によると、相模灣一帶の百尋線以下淺部は、所によつて相違もあるが、一般に隆起して、水深が在來に比して、二尋淺くなつてゐる。海岸線から見た陸部は矢張り數尺隆起せる部分が少くなく、特に那古、船形、館山方面一般にさうである、三浦半島南部も幾分隆起してゐる。伊豆の伊東、網代、熱海附近も多少隆起してゐる。特に初島附近は矢張三、四尺の隆起を見、伊豆大島及び下田に至つては殆ど變化はない。相模灣の深部の測深の結果によると、方々で在來の深さに比して相違があり、明かに陷落してゐる。その程度は所によつて違ふが、少くて二、三十尋多きは七、八十尋も陷落してゐる。之等の陷落部を總合すると、測深箇所が少いから詳かに出來ないが、大島と稻取の中央部から北東に馬入川江の島の沖合十數浬の所に當つて、相當廣き面積の陷落部がある樣に思はれる。水産講習所の館山應の島臨海實驗所附近の隆起狀態を親しく調査した所によると、少くとも五尺五寸前後の隆起がある。かかる變化は今後調査を進めるに從つて尙ほ各所に相當あるものと思はれる。水温の調査によれば例年と大した變化はないが、唯表面水温丈が一二度前後低きも、五百米突に至つては寧　昨年に比して一度乃至一、五度温かい」と（十月二日東京朝日新聞）

## 大島江ノ島間の海底に著しい變化

海軍水路部の實測

海軍水路部では測量艦武藏、大和及測量班をして東京灣並に相模灘の沿岸地形の變狀沖合の水深略測をした。其の結果によると房總半島の西側即ち東京灣口の東側は約二尺隆起し、南に進み館山灣附近は四五尺、洲の崎附近は約六尺に達し、野島崎附近まで

は約五尺、鴨川附近は約三尺に減じ、漸減して小湊附近までは多少の隆起はあつたが、勝浦附近に至つては全く變化がない。東京灣の西側では横濱が海岸、岸壁、防波堤等の沈下によつて土地低下したやうに見えるが實際に於ては變化がないらしい。夫より南方に進むに從つて土地隆起し、横須賀浦賀附近の二尺乃至三尺より三浦半島の南角鰒崎、三崎附近は四尺乃至五尺に達してゐる。相摸灣では三崎より北に進むに從つて土地隆起の程度小となり、逗子、鎌倉、江の島附近で約二尺、北岸に至るに從つて一層漸少してゐる。伊豆の東岸では眞鶴沿岸約二尺、熱海網代附近は沈下し伊東附近は再び一尺低下してゐるが、眞鶴崎に接した笠島は八尺初島は七尺隆起してゐる。伊豆七島は何等の變化を認めない。

水深は東京灣内は大差なく、灣内より相摸及房總半島の東側小湊附近に至る間の沿道は約一尋淺くなつた、相摸灣の一部では海底の一部に著るしい變化あるが發見した。即ち大島乳ヶ崎の北西の方約六浬より江の島南西方約八浬に至る間で、舊水深より約五十尋深く數個の水深を測得し、該陷沒部の北部兩側に於て東側では約六十尋、西側は七十尋乃至百尋淺い水深を發見した。

以上の如くだが沿岸小船艇の通路等を除き、從來の海圖で一般の航海には差支ない。尙ほ水路部では今回の測量を豫備とし、更に第二次の精細なる測量に着手する筈だと。(横須賀特報)(十月十七日、東京朝日新聞)

## 日本大地震の原因はこれ

二日紐育特派員發

昨年の智利震災を調査すべく、カーネギー學術研究協會より南米に派遣されたベーリー・ウイリス教授は、驚くべき報告を發表して曰く、アンデス山は東方に向つて移動し加州の山脈は北方に向つて移動しつゝあり、右移動の結果昨年智利に地震起り、最近日本に大地震が起つたものであつて、桑港も其一般的法則より脱し得なかつたのであると思はれる。地球の表面の變化は永久的であるから、今後家屋を建築するに當つて耐震家屋を建築すべく心掛ければならぬ。尙同教授は南米のアンデス山脈は一世紀間に一メートル乃至二メートルの割合で東方に向ひ移動しつつありと斷言した。(十月五日東京朝日新聞)

## ○相州大山の山海嘯

相州大山は地震の爲各所に龜裂崩壞甚だしかつたが、十七日午前零時半頃の豪雨で俄然海嘯起り、山腹の大山町に雪崩落ち、町民は辛うじて逃げたが、郵便局を始め、旅館及數十戸の御師の家等合計八十一戸は土砂に埋沒し、老婆一名慘死した。山海嘯の餘勢は大山の東麓高部屋村日向の一部落十一戸埋沒し、死者七名を出した。(平塚特報×九月廿一日、東京朝日新聞)

尙ほ震災後登山したる人の談に據れば、丹澤山塊の諸山は地震の爲め夥しく崩壞し、岩骨を露出したる赭色の裂傷は、到る所に其姿を見せ、東海道線の汽車中よりも望見し得可しといふ。

## ○富士山を踏査に

大地震の震源を富士山の大爆發と傳へ、或は又秩父連山大活

動の結果富士の山容に大變形をなした等の誤報が遠く海外に迄傳へられたので、同山麓の須走及び御殿場の有志は「マウントフジ」として世界的秀峰の未調査を遺憾とし、大日本體育協會有志や山岳會の富士研究者に實地調査方を依頼して來たので、一行は五日頃東京出發震害後最初の登山を試みる筈である。（十月四日東京朝日新聞）

## 富士山頂に新噴氣孔

沼津測候所の井出東一技手は、震災後の富士山頂を調査すべく單身去る三日須走口から登山、四日朝頂上を極め、御殿場口から下山した、氏の實地調査した所によると、山嶺の噴火口には異狀を認めないが、劍ヶ峰は右手の方が內側に崩壞し駒ヶ岳成就岳も崩れてゐる。又內輪廻りの途中金明水より少しく下つた所に東西に走れる六條の龜裂を發見したが其最大なるものは深さ一丈餘幅二尺長さ十間あつて物凄い程である、そしてこれが內院に崩壞しさうに思はれた。更に伊豆岳には橢圓形の長徑三尺短徑一尺五寸の噴氣孔を新に生じ、蒸氣を噴き上げてゐた。此種の噴氣孔は小さいけれども他にも所々あるらしい、尙劍ヶ峰より北に廻り、大澤を經て釋迦岳に向ふ途中、金明水より西向して高き所に達せんと思ふ地點に大きな穴を見出した、此穴は橫に深く且曲折してゐるので、其の深さを測り知る事を得ないが、其入口は高さ四尺間口二尺五寸あつた。次に御殿場下山口は八合目以上は道路破壞し、九合目の石室は落下した岩石の爲めに家屋を滅茶苦茶にこわされてゐる、更に八合目から俯瞰した所によると、寶永山にも多少の龜裂あり、屏風岩崩壞して噴火口內に落下した形跡が目にはいつたと。（十月十二日國民新聞）

## ○八ヶ岳に大龜裂

甲信國境に聳えた海拔九千七百尺の八ヶ岳は大きな噴火口を有し、その昔猛威を逞うした跡を物語つてゐるが、今度の大地震に頂上から左右にかけて數百尺の大龜裂を生じ、またそれと少し離れて幅二百間ばかりの大地辷りを現出したのを泉野小學校教員等が發見した（上諏訪）（十月十四日報知　聞）

## 八ヶ岳調査

甲信國境の八ヶ岳山中に九月二日の大地震により大龜裂及び地辷りを生じたりとの噂專ら傳へられたので、京都大學講師理學士本間不二男氏はこれが實地調査の爲め十七日來縣、十八日小山諏訪郡書記と共に山麓の泉野小學校に赴き實驗者の談話を聽取したが、十九日人夫を雇つて登山し詳細なる調査を行ふ筈である。右に就て本間氏は語る。「先年桑港大地震の際附近の山に大龜裂を生じて、冬の間に積つた雪が春になつて解け出した時、其の水が龜裂に流れ込み、地熱の爲め蒸發し、遂に爆發を見たことがあつた。今回もそれを心配して實地調査をやつて來た次第であるが、多分杞憂に過ぎないだらうと思つて居る」（長野電話）（十月廿日東京朝日新聞）

## ○燒嶽の噴煙增加

日本ルアプス山中の燒嶽は二十六日午後五時頃より噴煙甚だしく增加し、八里を隔つる島々にまで降灰頗なるより、或は大噴火の前兆ならずやと附近の住民は戰々兢々としてし居るが、本年は燒嶽大噴火の八年目に相當すると、右に就き、山地强行軍に加はり二十六日午前十時燒嶽の絕頂を究め、同噴煙を毒瓦斯と假定して防毒覆面の演習を行ひ、同夜上高地に露營して廿七日歸隊した松本聯隊機關銃隊の一將校は語る。「さう言はれゝば噴煙は平常より少し多いと思つたがそれ程には思はなかつた。夜は少し明るいと思つた位て、火柱が立つといふ程てもなく降灰には氣が付かず、勿論爆音等は聞かなかつた」(松本電話)

燒岳噴火(夕刊)の後報によれば、廿七日午後七時頃大音響と共に黑煙を漲らし折柄烈しき北風のため白骨溫泉方面は猛烈なる降灰あり、島々口より波多村附近一帶に亙つて屋根と言はず道と言はず草木の葉と言はず全く灰に掩はれ、殊に目下三齡前後の夏蠶に捺へた桑葉は、給葉に適せぬ程の被害を受けた。又島々一帶は今尙盛んに降灰中のため天地晦冥殆ど日光を見ず、新に數十の噴火口の噴出された如くに見えて、凄慘の狀を呈して居る。(松本電話)(六月二十日東京朝日新聞)

二十六日夜突然活動を始め、二十八日に至つて平常に復した燒岳は二十九日朝から噴煙猛烈となり、濛々として天に冲する樣物凄く、附近一帶に降灰し、三十日に至るも依然其狀態を續けて居るが、目下の處まだ鳴動は感じない。(松本電話)(七月一日東京朝日新聞)

## 燒岳復噴煙

去月二十六日以來活動繼續中なる燒岳は、二十六日午後四時頃又復噴火し、同九時半より十一時半に亙つて殊に甚だしき鳴動感じ、附近一帶に降灰し、遠く松本方面にまゝ及んだが、二十七日朝に至つて漸く靜まつた、同岳は二十七日夜秩父宮殿下が御一泊あらせらるべき上高地溫泉に距る僅かに半里の近距離にして、噴煙濛々たる壯觀は計らずも殿下の御興を惹かせらるゝことゝ推察される。松本測候所大久保技手は其活動狀況に就て語る。「今回の爆發箇所は大正八年十一月に於ける爆發箇所で、小さい噴火口が多數のため、たとへ噴煙降灰が多くても石など吹飛ばす惧れはないから其點は安心てある。今回の活動は前回と異なり全く無定期で噴煙を續けてゐるが、降灰量も著るしく多くなつたやうに見受られる、殊に風の關係で飛驒方面よりは信州方面に降灰が多い」(松本電話)(七月二十八日東京朝日新聞)

# ○登山案內組合

山梨縣北巨摩郡清哲村石佛會より左の如き通知に接したり。

從來南アルプス鳳凰山の開發保勝の爲め微力乍も貢獻し來りし本會儀各地山岳會は勿論一般アルピニストよりの希望に依り今回登山案內部を設立仕り候に就ては宜敷御指導御善用被相成度此段及報告候也

大正拾貳年七月八日

山梨縣北巨摩郡清哲村

南アルプス鳳凰山開發保勝石佛會

日本山岳會御中

追而規則等目下起草中に之有り候間近日中に送附仕る可く左案内人夫氏名報告仕る可く候

登山案内人夫氏名(案内部役員未定)

加賀爪　廷太郎　加賀爪清恒　藤盛保房
山本嘉十　島崎吉重　山本與之吉
水上千代作　下村元治　小澤時太郎
小澤勘三郎　藤島時次郎　藤島市作
伊藤茂　小澤榮次　藤島鶴吉

石佛會幹事　加賀爪正光(事務部)　同　健一(事業部)
伏見　武(會計部)

## ○山岳圖書紹介

### ○山行

槇有恒著

此書の收むるところ主として千九百十九年の秋より同二十一年の秋に至る間、瑞西ベルナーオーバーランド及びツエルマット地方を中心としての登山及印象の記錄であるとは、著者が本書の緒言に於て述ぶる所、更に著者は「アルペンの偉大透徹なる精神は自ら克難して登山する者に最も容易に展開する。私等は先づ其玲瓏乎として中空に輝く神壇に於て試錬を經ねばならぬ。かうしてアルペンの永遠に謂るところのものは實に――實生活への眞摯なる健闘に外ならぬ。アルペンは決して彼の遊子の優雅なる怠惰や放逸の對照として存在するものではない」と喝破して、登山に對する著者の態度を明にしてゐる。げに本書が一讀して卷を掩ふに忍びない所以のものは、行文の流麗と辭句の佳美なることが最大の源因ではなくして、この「偉大なる精神」に向つて健闘しつゝある著者の眞摯さが讀む者の心に強く働く爲であらう。かの幾年か間に幾人かゞ企てゝ常に失敗に終つたアイガー東尾根の難登攀に著者が成功したのは、一外字新聞の評したやうに氣候が誂向さてあつたにしろ、蓋し偶然ではない。内容は第一章山と或る男・第二章アンペンに於ける登山の發達、第三章登高記、第四章南側よりのアンペン、第五章山村の人と四季、第六章板倉勝宣君の死第七章岩登りに就いての七章と四十餘のコロタイプ版とよりなる上製の菊版にして二百六十六頁。定價三圓二十錢、改造社發行。

### ○登高行　第四年

千九百二十一年より同二十三年に亘る慶應山岳部の年報であつて、鹿子木氏の山岳の靈、槇氏の岩登りに就て、青木氏の冬の八ヶ岳、大島氏の三月の槍ヶ岳、三田氏の春雪の立山と劔岳、同氏の瞰され易い山積の傾斜に就て、宮川氏の山彦、大島氏の山上所觀、及び他に二三の雜譯あり、孰れも興味と實益と研究とに充ちた記事である、珍しい冬の山の寫眞が多數挿入されてあるのも嬉しい。假綴菊版二百五十頁、實價壹圓七拾錢、三田慶應義塾體育會山岳部發行。

### ○リユックサツク　第貳號

同じく假綴の菊版六十餘頁の雜誌であつて、論説に船田氏の五

月の Skigelände と槍ヶ岳、記行に小笠原氏の槍より穂高へ、大井氏の三月の劔岳、大村氏の憧れの赤石へ、及び他に雜錄數篇あり、口繪として寫眞版六葉を添ふ。定價五十錢。早稻田大學山岳スキー部の發行で、千九百二十二年より同二十三年に至る同部の年報である、（以上三項木暮）

## ○會員通信

△拜啓。小生は本月六日より立山へ參り、廿五日迄連日風雨に惱まされ、閉口致し候。漸く廿五日午後からの晴に劔澤に入り、又翌日は雨にて失望仕り候ひしが、二十七、二十八兩日の快晴に遂に劔岳の「八峯」の峯々を極め、二十九日富山へ下山致し候。八峯より俯ぜし長次郎谷の壯觀と力强い岩壁、鋭き尖峰の群立は、深く印象に殘り居り候。尙ほ學習院、慶應の八峰登山隊は一度は失敗し歸京いたし候ひしが天候恢復と共に再び登山いたす由に候。（七月三十日富山にて舟田三郎）

△拜啓。八ヶ岳行を思ひ立ち、一行五名上野を出發せしは七月廿八日の終列車、翌廿九日朝佐久鐵道終點小海に下車。日薩すらなき佐久甲州街道を南行し、猪名湖畔の木蔭にて雄大なる八ヶ岳山塊を仰ぎ見ながら長時間休憩せし爲、本澤溫泉に着きたる時は午後四時半頃。明れば三十日未明發足、硫黃山上にて日の出を拜し横岳の瘦尾根を傳ひて赤岳の頂上に午前七時五十分着、眺望廣濶大休憩。之より中岳を經て阿彌陀ヶ岳に登り、夕日に照されながら俎原の長き裾野を過ぎ、午後六時茅野驛着上諏訪一泊して卅一日歸京仕候。幸にして天候快晴、甚だ愉快に存じ候。（八月十八日野口末延）

△七月卅日午前十二時五十一分の夜行で熊本へ行き宮地線にのりかへて午前八時頃坊中驛下車、直ちに阿蘇へ登山致し候。坊中口登路の約六合目から右に往生岳へ登り、更に杵島岳を攀ぢ、南に下つて本堂に辿りつき小憩、中の岳火孔を見物し、烏帽子千里ヶ濱の西部の草原に露營し、卅一日午前七時露營地を出發し、烏帽子岳の最高點へ七時三十分に着、八時五十分露營地に歸り、直ちに杵島岳の西裾から米塚寄生火山の附近を經て赤水驛へ十一時につき、午後一時五十分迄汽車を待つて、午後八時すぎ箱崎へ歸着致し候。中の岳の火孔は昨秋に比して狀態全く一變致し居り、且つ噴烟多量にて壯觀言語に絕し居り候。即ち昨秋北方三ヶの火口は僅かに噴烟を見たるのみ、南の一ヶは鉛色の溫泉を湛へ居りしものが、本年はその溫泉は跡方なくなりて深く破壞され盛んなる噴烟をなし、名物のヨナヽ降らし農作物に大被害を來し居り候。他の三ヶの內この直ぐ北の一ヶは著しく淺くなり、平坦なる圓形の砂地と變じ、活動を止め、その北の二ヶは溫泉を湛へ居り、殊にその一ヶは沸々と沸騰し居り、硫黃臭甚しく物すごく御座候。

又中の岳の外輪山や高岳の黑褐色の山肌はヨナの爲に全く灰色を呈し、一種異樣の感じ有之候。以上。（七月卅一日夜竹內亮）

△七月十九日夕、東京出發。二十日、松本發一番汽車にて六時半頃有明着。途中、雨にふられて中房へ一時すぎにつきました。廿一日朝六時ごろ中房發、燕小屋へ九時半、霧にまかれたり風に吹かれたりして十二時半、大天井につきました。日のある中に殺生小屋へつけぬと案內がいひますまゝ、二の俣小屋へ一時四十分

つきました。常念小屋へはあまり早くつきさうなので、二の俣の澤をおり、五時半槍澤のドウ、雨にあつて七時に槍澤の小屋につきました。廿二日、お天氣のよくないのに雪渓を大槍の小屋のあたりまで登りましたが、前日二の俣澤をおりるとりに痛めた足の指が、甲かけにおされるので、槍澤小屋にとつてかへし、甲かけをかへて、十二時ごろ出發、その夕六時ごろ濡れながら上高地の五千尺旅館までおりてしまひました。廿三日の午前は田代の池や大正の池などへゆきました。午後は夕立。その夜からかなり荒れて、梓川は濁流となり、河童橋も動くので、ぐづ〳〵してゐましたが、正午から風だけ止みましたので、昨夜宿でおめにかゝつた金澤の林並樹教授のおすゝめに從ひ、午後一時上高地發、德本峠までにすつかり濡れましたが、八時近く島々驛につき、それから松本、すぐ東京への汽車にのりました。德本で、足のおそい私が林教授よりさきになつたので、案内者にきくと、お年寄と話をしてゐられると言ひました。どうしたのかとあとで伺ひましたら、田部重治氏にあはれたのださうです。田部氏も信州のおぢいさんに六十ぐらゐに見られてはたまりません。そのせいか、どうか私はちつとも心づかずに失禮しました。（別所梅之助）

△十一日の夕方五時半茅野に下りて月見草の多い道を四里瀧ノ湯へ上りました。むし暖い宵で、縞枯山の向ふに稻妻が光つて夕方でも來さうな氣配でしたが湯に着くまで遂に雨らしいものは來ませんでした。湯は大變な混雜で六疊に六人、八疊に八人といふ騷ぎ、加之夜おそくまで盆踊の豫習か何かをやられて閉口しました。翌朝は五時出發、草深い道を朝露に濡れ乍ら暫く行つて瀧ノ湯川を右岸に渡り、桔梗の咲く草原を少し登ると眼界が開けて來ました。頭上に蔽ひかゝる横岳から南へ八ヶ岳の連峯がズラリと並びます。正南に甲斐駒、仙丈あたりが曉の色を美しく見せてゐました。八ヶ岳の裾野の落葉松林は實に奇麗です。

草原を登る二時間、一寸した平地へ出ると木曾駒、御岳、乘鞍から針ノ木のあたりまでが望まれました。道はこれから針葉樹林に入つて暫く急な登りが續きます。時々振返つては裾野の緑を嘆賞しました、八時十五分林を抜けて磊々たる岩に移りました。蓼科山の三角點に立つたのは八時半、頂上は二町に三町位の凹地で中央に小石祠があります。靜な風もない日でした。四阿、淺間、が北に東南に甲武信以西の秩父連山が望まれました。八ヶ岳の薩になつて富士山の見えないのも一興です。九時半下り始めて歸路は林を抜けた所から道を八子ヶ峯寄りにとつて温泉へ直接下りました。八子ヶ峯附近は平ヶ岳に似たやうな所もあつて極めてのんびりした感じの所です。日盛りを茅野へ下る頃、山の上には眩しいやうな入道雲が湧いてゐました。（大正十二年八月、藤島敏勇）

△十八日秋のやうな陽の色を浴びて王ヶ鼻の石切場へ着いたのが午後七時、無人の小屋に泊るのも退屈だらうとまた峠を越えて牧場の茅小屋まで辿り着きました。五日位の月が冴えて鉢伏山の笹が光つて奇麗でした。

十九日、清々しい朝、美ヶ原へ上りました。今は丁度放牧の時期なので馬が二三百あの廣い原に遊んでゐました。物見石山へかけて一里に近い原の廣さは呆れる程です。もう秋草が盛りで、山の夏のいかにも短いのを思はせます。槍、穗高や北に淺間が見えて

ねましたがそれもいつの間にか雲に包まれて遺望はなくなりました。

原から三十分茶臼山の三角點までは緩な上り、人を珍らしがつて寄つて來る馬が不氣味でした。山頂から見ると美ヶ原の廣さは限りないものです。茶臼山以南は山容が著しく變つて扉峠へは可成急な下りが續きました。扉峠の道は通行する人も少いせいか薄や莚が繁つて草いきれのひどいいやな道です。鑛泉まで峠から一時間半。登りなら三時間はかゝるでせうと思はれました。(大正十二年八月、藤島敬男)

△拜啓過般は御多忙中にも關らず種々御教示に預り難有奉存候。長次郎は都合出來不申、宮本金作外三名の人夫か引具し、友人小松喜一君、伊藤健夫君と七月廿三日小見出發、今年富山縣が新に開きたる有峯通路即ち鳥ヶ尾山、鉢伏山か越え、一六八六米と一六一六米の中間なる「アシ谷」に野營仕候。此道路は東笠山を經る道より遙かに近く候。廿四日有峯に下り眞川に野營致候。有峯より眞川迄は倒木縱横困難仕候。廿五日上ノ岳下野營、廿六日滯在、午後藥師岳に濃霧中に登り候が眺望絶無。頂上に一高學生三名の名刺あり、去る廿一日の日附にて藥師の肩に四日五晩雨に閉ぢ込められたる趣記載有之候。翌廿七日上ノ岳尾根にて濃霧の爲め約一時間も間誤付き、黑部五郎岳下で羚羊に歡迎され、蓮華との乘越に野營。廿八日双六池にて大町の佐藤靜馬に出會、前記一高學生連は同人の一行なりし由に候て、有峯に下りし由判明仕候。同夜硫黃澤野營、廿九日槍ヶ岳に第三回登山、喜作新道を中房温泉下り宿泊、三十日松本より歸京仕候。(伊藤新三)

本會幹事辻村伊助氏は、昨年九月一日の大震で不幸逝去されたことは別記の通りでありますが、同氏の遺稿を整理するに就きましては、若し書狀其他斷簡片墨なりとも御所持の方がありましたら、御貸與を願ひたいと思ひますから、左記宛に御送付又は御通知下さらば幸甚の至りであります

東京府荏原郡大井町出石五〇五〇

辻　清次郎方

高野鷹藏

# 會報

## ○第十六回大會記事

大正十二年五月十九、二十日の兩日に亘り、赤坂溜池三會堂に於て、本會第十六回大會として山岳寫眞展覽會を開き、二十日午後六時より階上の大廣間にて講演會を催し、左記二氏の興味深き講演ありたり。

飯豐山　會員　沼井鐵太郎氏
立山と黑部川　幹事　冠松次郎氏

始は兩講演とも幻燈を使用する豫定なりしも、開演間際に至りて機械の破損を發見し、當事者の百方奔走盡力せるも其甲斐なく、折角準備したる多數のスライドも之を映寫する能はずして、講演者は勿論來聽者の感興を殺ぎたりしは、本會の頗る遺憾とする所なるを以て、更に十一月を期して臨時講演會を開く筈なりしも、大震の爲終に之を果すこと能はざりき。當日の來會者は會員及會員外を合せて百五十餘名に達したり。

## 山岳寫眞展覽會出品目錄

○別宮貞俊氏出品

飯豐山頂

○藤島敏男氏出品

戰場ヶ原
小田ヶ原より望みたる太郎山
光德沼より見たる大眞名子小眞名子
白雲瀧
小田ヶ原より見たる男體山
泉門池附近より男體山を望む
御澤より太郎山を望む
アテ越より見たる笠ヶ岳
太郎山頂
戰場ヶ原
尾瀨ヶ原より見たる至佛山
尾瀨ヶ原より見たる燧岳
日光西の湖一
二

中禪寺湖より白根山を望む
外山澤
中禪寺湖
千手ヶ原より見たる白根山
猫坂より見たる金峯山
淺間山
日光大平
○船田三郎氏出品
春の槍ヶ岳
吹雪の前（槍の肩）
○伊藤孝一氏出品
春の立山　八景
○冠松次郎氏出品
長次郎澤より
小窓の頭
遠山川
內藏之介澤
○加山龍之助氏出品
鷲羽岳頂上より　七枚續き
○木村鑛吉氏出品

男體山
小淺間山
○松本善二氏出品
赤岳より權現岳を見る
蛭ヶ岳（姫築の原より）
丹澤山（同）
鏡ヶ池
八ヶ岳
阿能川岳
○中島謙吉氏出品
平小屋より
白骨溫泉
○岡村仙太郎氏出品
槍ヶ岳より
北穗高より槍ヶ岳を望む
○六鵜保氏出品
黑森山
東西赤石山
大步危
戸中橋

面河谷
同　關門
同　熊淵
五良津山道
石槌山
○高野鷹藏氏出品
タウヤクリンダウ　透明畫
冬の八ケ岳　同
ウテフラン　同
チヤウノスケサウ　同
コバイケイサウ　同
湖畔
山村
○辻村伊助氏出品
グロース、シュレックホルン一
トウーン湖畔
藥師岳太郎兵衞平ハクサンイチゲの群落
白樺（神河内）
赤城新坂の原
神河内の朝

山へ入る路（北安曇大出村）
白馬の雪隙
五色ケ原野營地
高瀨川
槍裏の暴風
春の燒岳
赤城大沼の冬
テルス、プラッテ
山の話（ブリュームリス、アルプにて）
アルペングリューエン（同）
ブリュームリスアルプ
アヴァランシェ！
アルプナッハ湖畔
クーグロック
トウーン湖畔の冬
グレルニッシュ山塊
クシュタート
メンヒ、ヨッホよりシュレックホルンを望む
シンメンタール
クシュタートの夕方

○戸木信佳氏出品
劍ヶ岳
○高島北海氏出品
日本北アルプス　其一
同　　其二
長門峽　其一（コロタイプ）
同　　其二（同）
同　　其三（同）
同　　其四（同）
○早稲田高等學院旅行部出品
池の平より
劍ヶ岳
○山田應水氏出品
日本北アルプス　十景
祖母谷溫泉附近
猿飛附近
上高地

## ○第二十二回小集會記事

大正十二年六月十日午後一時半より麹町區日枝神社境内やまとにて、冠幹事司會者として開催、左の講演ありたり。

西澤溯行　　岩永信雄氏
春の燒山と火打山　　冠松次郎氏

來會者は神谷恭、堀龜雄、別宮貞俊、船田三郎、松井幹雄、本田友司、磯貝藤太郎、佐藤文二、中村常雄、岸偉一、飯塚篤之助、伊藤新三、沼井鐵太郎、岡野德之助、松本善二、高畑良材、大塚泰亮、岩永信雄、伊藤朝太郎、野口末延、小南清、川口敏郎、加藤義夫、石川孟範、梅澤親光、冠松次郎、植有恒、高頭仁兵衞、鳥山悌成、辻村伊助、木暮理太郎の三十一氏にして、他に會員外の來會者七名なりき。

## ○會員章再貸與

九月一日の大地震は、關東地方に被害甚しく、殊に多數會員の居住せる東京及横濱は、震災に次ぐに火災を以てしたれば、罹災の會員も亦多かる可く、其他の災害を被りたる地方に在りても、罹災者なしとす可らず、從つて會員章を遺失又は燒

失せる人も少なからざる可しと信ず。而して會員章は本會會員たる者の必ず貸與を受く可きものにして、且つ之を紛失したる時は直に再貸與を乞はるべきものとす。再貸與に關しては先に其手續を規定し、届出と共に金貳圓を納付することゝなり居れるも、今回の如き非常の天災に際しては、必ずしも此規定に據る能はざるを以て、過日の震火災に因りて會員章を紛失したる會員に限り、所定の金額を納付するに及ばず、單に會員章紛失の趣を事務所に届出らるゝ時は、特に再び之を貸與す可きを以て、未だ其手續を了せられざる向は、速に届出あらんことを望む。

## ○本會規則改訂

本會の評議員は、發起人及幹事と元幹事にして現に會員たる者を以て之に充つる規定なりしも、幹事は三年毎に改選せらるゝが故に、改選の都度元幹事の數は增加し、從つて評議員の數も增加す可きに依り、之を制限する必要あり。仍て大正十二年三月四日の評議員會に於て、元幹事にして評議員たる可き者の數を五人と定め、互選に依つて選出することゝしたり。

第八條　評議員ハ本會發起人及ビ幹事ノ外、元幹事ニシテ現ニ會員タル者ヨリ互選ニヨリテ選出シタル五人ヲ以テ之ニ充ツ。

## ○會務報告

大正十二年三月四日午前十時清水谷皆香園に於て、評議員會を開く。幹事改選後最初の評議員會とす。協議事項左の如し。

一、會務引繼の件　一、本會規則改訂の件

（出席評議員）藤島、冠、木暮、近藤、六鵜、高田、高頭、高野、武田、鳥山、辻本、辻村梅澤。（槇氏は當時入院中なりしを以て未だ幹事當選の通知を發せざりき）。

此日入會を許可せられたるもの左の如し。

大須重弍、岡本三男、和田秀夫

同年四月二十五日午後一時本郷根津權現社境内娯樂園に於て幹事會開催、左記の事項を協議す。

一、第十六回大會に山岳寫眞展覽會開催の件

一、事務所移轉の件　一、事務員解雇の件
一、會員章未引換者處分の件　一、廣告料決定の件　一、會計引繼の件
終て入會申込者の詮衡を行ひ、左記三名入會を許可せらる。
川本龍馬、ゼオ・パワース、荒木林之助
（出席幹事）藤島、冠、木暮、高頭、鳥山、六鵜、高田（委任）辻村（委任）
（常任評議員）辻本、高野（委任）
同年六月十日麴町日枝神社境内やまとにて午前十時半より幹事會開催、左の件を附議す。
一、雜誌名「山岳」を登錄する件　一、十一月臨時大會を開催する件
終て入會申込者の詮衡を行ひ、左記七名入會を許可せらる。
神宮寺彌太郎、古谷孝一、山本六三郎、中島正立、山片清四郎、黑田正夫、信太儀右衞門
（出席幹事）冠、木暮、槇、六鵜（委任）高頭、鳥山、辻村
（常任評議員）高野（委任）

## ○英文欄中止

本誌は附錄として毎號英文欄を添え來りしが、九月一日の震火に東京市內の印刷所は、大半燒失したるを以て、印刷能力の復舊する迄當分之を中止することとしたり、讀者幸に之を諒せよ。

## ○會員の訃報

横濱市磯子町字廣地二一八番地村岡齊氏は九月一日會社に勤務中、地震の爲に死去され、東京市深川區伊澤町七番地服部與兵衞氏は、同じく九月一日震後の火災を遁れんが爲船に乘りて避難中、不幸にして家族三名と共に死去せられたり。尙ほ百瀨亥三松氏は去る八月十二日に、尙昌氏は六月中に死去せられたる由通知に接したり。本會は右の四氏に對し、謹で弔意を表す。

## ○交換及寄贈圖書目

歷史地理　第四十一卷第一號—四號
ツーリスト　第十一年第一號、二號、三號

地學雜誌　第三十五年四百九號—四百十二號
地質學雜誌　第三十卷三百五十二號—三百五十五號
山とスキー　第二十三號—二十五號
地質調査所報告　八十六號八十七號
史蹟名勝天然紀念物　第五卷第一號、二號
關西時報　第一號—九號
アルコウ趣味　第十年第四號—六號
きりのたび　十一號
Bird-Lore Vol. XXIV No. 6 Vol. XXV No. 1, 2.
Penalara Vol. IX No. 107 1922.
La Montagne 19e Année No. 156, 157, 158, 159, 160.
The Geographical Journal Vol. LX No. 6, Vol. LXI No. 1, 2, 3.
Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya Ano XXXII No 332, 333, 334, 335.
Hrvatski Planinar Godiste XVIII Br. 1–11.
Natural History Vol. XXII No. 6. 1922, Vol. XXIII No 1, 2.
Mazama Vol. VI No. 3, 1922.
L'écho Des Alpes 58me Annee No 12, 59me Annee No 1, 2, 3, 4.
Trail and Timberline Num. 52, 53, 54, 55, 56.
The Mountain Peaks of Colorado.
Colorado Chautauqua Bulletin Vol. XII No 1, 2, 3, 4, 5.
The Mountaineer Vol. XV No. 2, 3, 4, 5, 6.
The Prairie Club No. 122, 123, 124, 125.
The Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia Vol. XX No. 4, Vol. XXI No. 1, 2.
L'Algérie Illustrée 13e Année Numero 5, 6.
Alpina 30 Jahrgang No 12, 31 Jahrgang No 1,2, 3, 4.
The Annual of the Mountain Club of South Africa No. 25, 1922.
Ladies Scottish Climbing Club. From January 1922 to January 1923.
Club Alpino Italiano Vol. XLI Num. 11, 12, 1922.

Vol. XLII Num. 1, 2, 1923.
Revue Alpine Vol. 23 No. 4, Vol. 24 No. 1.
Reports presented at the Annual Meeting, January, 1923. Appalachian Mountain Club.
17 Jahresbericht des Akademischen Alpenklub Bern 1 November 1921 Bis 31 oktober 1922,
Svenska Turist-Föreningens Arsskrift 1923.
Atlas över Sverige del 1.
The Scottish Mountaineering Club Journal Vol. 16 No. 95.

## ○會　告

○九月一日の大震災に際し、本會に見舞狀を寄せられたる會員少なからず、今一々芳名を擧げざるも、玆に其厚意を感謝す。幸にして本會の直接に蒙りたる損害は、幻燈機械及若干圖書の燒失に止まり、今後の會務を整理するに何等の支障を來す可き憂なきを以て、會員諸君は安心せられて可也。

○今次の大地震は、激震に繼ぐに火災若しくは海嘯を以てしたれば、烈震區域内に居住せられたる會員中には、不幸にして死亡せられたるもあり、然らざるも或は總に身を以て免れ、或は家財を全燒し、又は大損害を被られたる人甚だ多し。本會は此等罹災の會員諸君に對し、其無事なりしを慶すると共に深く其罹災に同情するものなり。

○本會幹事辻村伊助氏は、震災の日湯本中宿の自宅に在りしが、地震と同時に山上の大貯水池破壞して、一瞬に居宅を埋沒し、爲に一家を擧げて全滅の悲運に遭遇せられたり。今や會務漸く多端なるの際、同氏の如き適任者を喪ひたるは、本會に取りて大損失といふ可く、悼惜の情に堪えず。

○本號は九月發行の豫定にして、既に本欄の校正を了りたるに、偶ゝ大地震ありて活版所も火災の爲に燒失したれば、發刊を延期するの已むなきに至り、加之ならず東京市内に於ける大活版所は、一二を除き概ね火災に罹りたるを以て、殘存せる工場を買收して業務を繼續せるものも、活字の缺乏に苦しむ有樣にて、本誌の如きも從來の五號活字は燒失したるを以て新活字を使用したる故、既刊のものと字體を異にせるも致方なし。これも偶

以て震災を紀念するものと見ばよろしからんか。

○東京市赤坂區青山南町五丁目四十八番地在住の會員佐武正一氏より左記の如き來書ありたり。

前略。過日の會報に奥上州號有之候が、其奥上州に當る水上村谷川富士の麓湯檜曾附近は、目下小生の勤務せる鐵道建設事務所に於て日本一の長大隧道建造中にて、合宿も有之（其合宿に溫泉を引きある事も日本には他に比類なし）候。同地に宿舍なくして宿泊に御困りの方は、投宿の御便宜及同所迄澁川驛より乘物の便宜も會員に限り出來る丈取計ひ可申候。此段會員諸兄へ可然御披露願上候。草々。

## ○本會規則拔萃（大正十二年三月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルヘシ

第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム

第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス

第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名、年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄に納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手數料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尙ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ（以下略）

現任幹事（八名）
藤島　敏男　冠　松次郎　木暮理太郎
槇　有恒　六鵜　保　高田　達也
高頭仁兵衛　鳥山　悌成

評議員（十九名）
城數馬（在朝鮮）小島久太（在桑港）武田久吉
梅澤　親光　高野　鷹藏　近藤　茂吉
中村清太郎　三枝　守博　辻本　滿丸
田部　重治　山川　默
及び現任幹事八名

## ○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと
一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと
一、。、「」（）等は各一字劃宛とし行を更むる時は一字下げのこと
一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと
一、原稿は必ず左記宛て送附のこと
東京市本郷區駒込蓬萊町三十一番地「山岳」編輯所
尚編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと
殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり（スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大さに調製あらんことを望む）

### 正誤

第十七年第一號對八頁圖版の説明は單に高山植物とある可きを編輯者の記憶の誤より他と混同して記載したるものに付お花畑以下の五字を削除ありたし。

大正十三年二月十七日印刷
大正十三年二月二十日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　新潟縣三島郡深才村深澤　日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會會計取扱所
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

The Journal of the Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. XVII 1924 No. 2